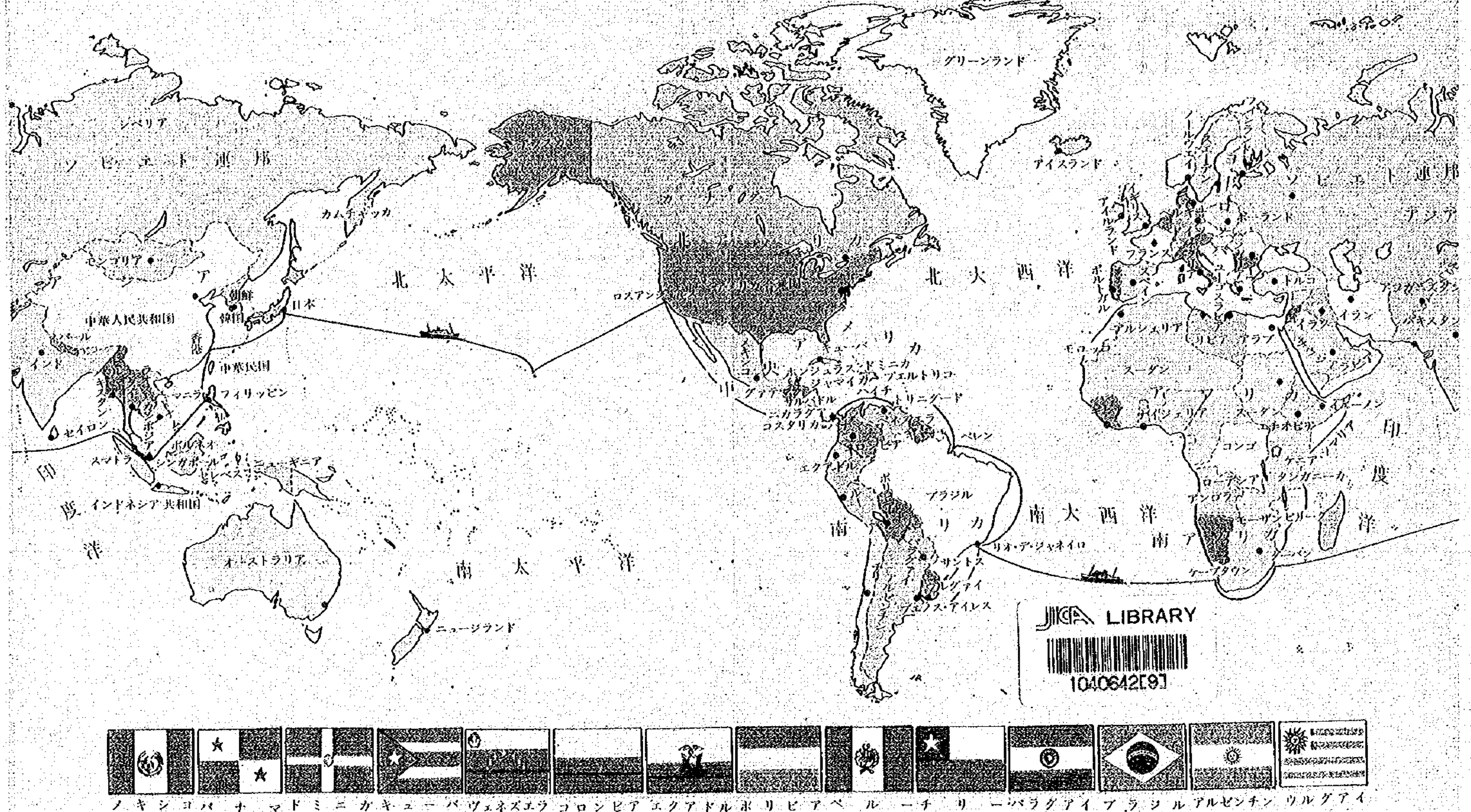
海外移住読本

下巻

海外移住事業団

世界総図　移住船航路



JICA LIBRARY
1040642[9]

海外移住読本

下巻

JEMIS
41.11. 1

海外移住事業団

海外移住読本正誤表（下巻）

頁	行	誤	正
6	1	アメリカ大陸	アメリカ新大陸
7	9	（19世紀前半）	（19世紀後半）
40	15	米国が世の	米国が世界の
40	16	ポルトガル及び界イギリス	ポルトガル及びイギリス
41	図表	トリニダード・トパコ	トリニダード・トバゴ
48	写真説明	機械工場における作業風影	機械工場における作業風景
57	〃	希望の出帆風影	希望の出帆風景
65	8	再来ポルトガル	渡来ポルトガル
77	〃	大統府政庁	大統領府政庁
82	〃	海抜3,800 mの高所にあるカ湖	海抜3,800 mの高所にあるチチカカ湖
82	8	2.27%の増加いる	2.27%に増加している
82	9	52%以上を率	52%以上の率
84	1	政治と安定的経済開発	政治の安定と経済開発
84	9	できないため革や農業	できないため農産物を
84	10	技農業改	農業技術
96	6	三浦按針	（三浦按針）

国際協力事業団
受入月日 '87.12.18
登録No. 08827
E000
23.4
EM

ま え が き

本書はさきに発行した海外移住読本の下巻として、近世に至って世界史に登場した若いラテン・アメリカの一般事情を概観し、あわせてわが日本人同胞が永住の地としてとけこみ、活躍している各国の事情を紹介して、より広い視野の下に移住に関する一般の理解を深めて頂くための参考として発刊するものである。これらラテン・アメリカ諸国は幾多の前近代的課題を抱えながら20世紀初頭から急速な経済的発展を示しており、未開の広域に眠る厖大な資源の開発は今や世界注視の的であり、わが国との関係も移住・通商・文化交流のそれぞれの分野において年と共に緊密の度を加えつつある。最近、中南米問題は国際社会における重要課題であるが、特に若い青少年層にラテン・アメリカ研究が採り上げられ、全国の大学・高校においてそれらの研究活動が展開されている。

本書がそれらの研究の一助ともなり、かつ又わが国の海外移住推進に少しでも役立ち得れば幸いである。今後更に改訂増補してゆくつもりであるが、大方のご叱正を頂きたい。

昭和39年3月

海外移住事業団

もくじ

まえがき

第1部　ラテン・アメリカの歩み……………………5

第1節　新世界の誕生……………………7
第2節　当時のヨーロッパ諸国……………………10
第3節　その後の300年間……………………14
第4節　独立から現代へ……………………15

第2部　自然と人……………………21

第1節　地勢と気候……………………22
第2節　経済の基礎的条件……………………24
第3節　混血する人々……………………25

第3部　社会と文化……………………29

第1節　スペイン系とポルトガル系の相違……………………30
第2節　スペインとポルトガルの影響……………………31

第4部　政治と国際的地位……………………37

第1節　概観……………………38
第2節　米国との関係……………………39
第3節　ヨーロッパとの関係……………………41
第4節　共産圏との関係……………………42

第5部 経済の動向……………………………………45

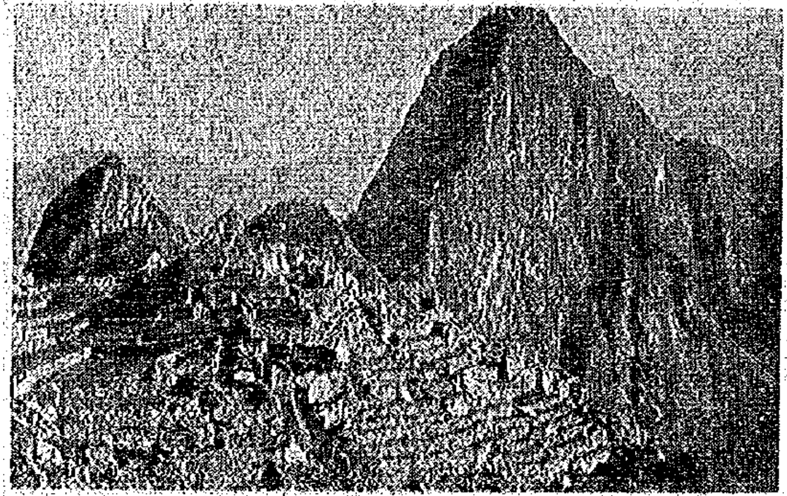
第1節 単一生産から多角化へ…………………………46
第2節 外国の投融資と援助……………………………49
第3節 貿　　易…………………………………………51
第4節 わが国との貿易…………………………………53
第5節 運輸通信と労働…………………………………54

第6部 日本と密接な関係を持つ国々…………………57

第1節 概　　観…………………………………………58
第2節 現在までの回顧…………………………………58
第3節 ブラジル国………………………………………61
第4節 アルゼンチン国…………………………………70
第5節 パラグァイ国……………………………………75
第6節 ボリヴィア国……………………………………81
第7節 ドミニカ国………………………………………86
第8節 ペルー国…………………………………………90
第9節 メキシコ国………………………………………93

あとがき（ラテン・アメリカの将来）

第 1 部
ラテン・アメリカの歩み



インカ帝国，マチュピチュの遺跡

アメリカ大陸のうちカナダとアメリカ合衆国を除いた全域、即ち中央アメリカ、カリブ海に浮かぶハイチ、ドミニカ、それにアルゼンチン、ブラジルなどの南米大陸の諸国を総称して、われわれはラテン・アメリカと呼んでいる。それはカナダ、アメリカ合衆国がアングロ・サクソン系人種によって建設されたのに対して、メキシコ以南の諸国が、スペイン、ポルトガルなどのラテン系人種によって建設され、言語はもちろん、その文化をも継承しているからである。

しかし、ラテン・アメリカの名称は歴史的には新らしく、今世紀の初め頃はイスパノ・アメリカまたはイベロ（イベリア）・アメリカと呼ばれていた。またブラジルを除くスペイン系の諸国をアメリカ・エスパニョーラと呼んでいた。それをラテン・アメリカと呼ぶようになったのは、第1次世界大戦が終って数年後の1930年前後からである。又一般にラテン・アメリカを中南米とも呼んでいる。

常識的には前述したように、ラテン・アメリカとは、スペイン人及びポルトガル人によって発見されて長く統治され、これら両国民の子孫と発見前から住んでいた原住民（インディオ）、それに労働力補充のために移入されたアフリカ黒人との混血が主として住んでおり、アングロ・サクソン文化とは違ったラテン文化を受け継ぎ、かつラテン系の言語を国語とする地域であるということが出来よう。

第1節　新世界の誕生

ラテン・アメリカの生い立ちを調べるとき、先住民であるインディオ（Indio）の原始的社会時代と、スペイン、ポルトガル両民族を主とするヨーロッパ諸民族がインディオを征服し、開発した15世紀以降との二つに大きく分けられる。即ちラテン・アメリカの歴史は、コロンブスの新大陸の発見（1492年）前とそれ以降とに分けられる。発見前はインディオの歴史であり、発見以後の歴史は

1. 探険とインディオ征服（15世紀以前）
2. 植民地時代（16世紀〜19世紀前半）
4. 植民地からの独立（19世紀前半）
4. 独立以後（19世紀後半から現代）

の四期に分類される。

コロンブスの大陸発見以来、この新世界の起源については種々の推測と研究が行なわれて来たが、一般には1万年から2万5千年以前のことだろうといわれている。

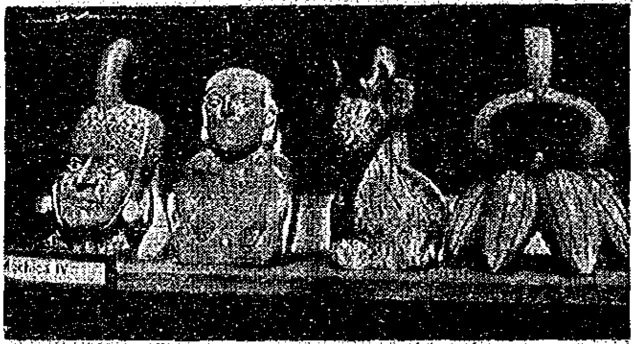
また、原住民が、どんな経路で新世界に住むようになったか、ということについても、学説はまちまちである。南太平洋の群島を渡って中南米に辿り着いたという人類学者もあるし、これに対して、ベーリング海峡を通ってアラスカを経て、新大陸に移動したという説もあるが、現在後者が通説になっている。これらアジア系の移住者は、北米大陸をロッキー山脈沿いに太平洋岸を南下し、メキシコ、中米、パナマを経て南米大陸に入ったといわれている。彼らは当時、狩猟と漁撈の原始生活を送っていた。家畜は人類の進歩を知る歴史上の尺度になるが当時北米では犬、南米ではリャマ（Llama）とされ、それ以外の家畜はわかっていないが、彼らがやがて、アメリカ大陸に咲いたマヤとインカ文明を生み出したのであった。紀元前8世紀頃、メキシコの北部に興っ

た文化はトルテック、アステック両族によるもので、石造建築、天文数学、暦学に通じ、1年が365日であることを知っていた。また、巨大なピラミットを作り、農耕技術、排水工事も相当進歩していた。紀元前5世紀頃になって現われたマヤ文化はユカタン半島、クリララマ地方に金、銀、織物、陶器等の製品を生み、また、マイス（とうもろこし）、ヘネケン綿の栽培も行なわれ、種族相互の交易も行なわれていたといわれている。

特に、政治は神聖な宗教観によって行なわれ、僧侶たちは象形文字の記録を残している。その記録は1517年にスペイン人がユカタン半島に上陸したとき殆んど破壊されてしまい、現存するものは僅かに過ぎない。

インカ文明 以上のようなメキシコを中心として興った文明より以前に、アンデス山脈やブラジル、ラ・プラタ、及びパタゴニアの地域に種族の定住が初まっていた。

しかし、南米における最古の部落は、ペルーの北部海岸地方で、紀元前2500~1500年頃であるといわれている。その後、前インカの文化は、ペルーを中心とするアンデス山脈の中央部に開花した。その後に興った文化の代表的なものは、紀元前 500~0 年のチャビン文化で、これは陶器、織物の技術に秀でており、「アンデス文化」の母体をなすものといわれている。西暦 0~500 年間のモチーカ文化は太陽と月の聖所と呼ばれる巨大な二つの祈禱所を建造した。この祈禱所から3トン以上の黄金が発見されたが、これは当時既に、政治経済の組織が一応確立していたからだと推察されている。


モチーカ文化の芸術的な高さを示す土器

次いでチァワナコの巨石文化と云われるものが現われ、次ぎに興ったのがイ

ンカ文化（紀元1000～1500年）である。

イシカはペルーのクスコを中心として栄え、1400年代にはアンデスの大部分を征服し、1533年スペインに亡ぼされるまでは、北はエクアドル辺から南はチリの二分の一ほどに至る細長い一大帝国を建設し武力を誇っていた。軍用道路や石造建築は古代ローマ人にも劣らず、土木技術はもちろん、灌漑設備をもち、通信、運輸の制度があり、公共の記録には縄を用い、金の採掘が行なわれ、社会は絶対の権力者である皇帝によって治められ、貴族、武士、農民などの階級が設けられていた。

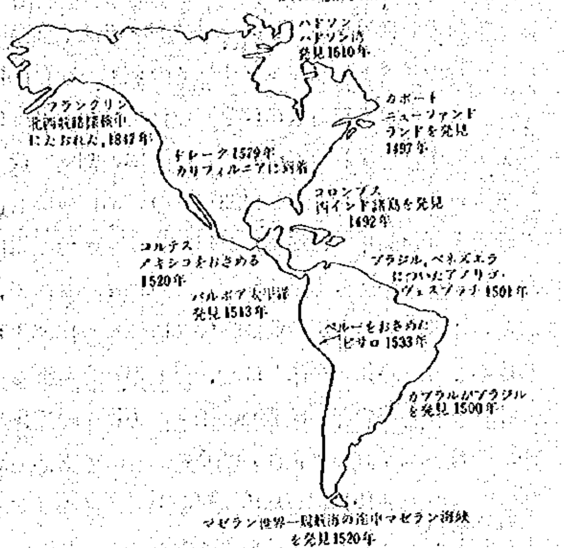
その後の15世紀後半は、イタリアの地中海時代から大西洋進出の時代である。

新大陸発見

大西洋開拓の先駆をなしたものはポルトガルで、インド航路の発見に努めた。又当時スペインは隆盛をきわめ、ポルトガルと競ってインド方面の進出を企てた。

ヨーロッパからインドへは古くから中東を経る道が開かれていた。それは危険の多い、長途の旅であったが、その危険を冒して、イタリアの商人たちはインドの珍奇な品物をヨーロッパに運んで巨利を得ていた。そこでスペインやポルトガルも東方の国々との交易を望んでいた。コロンブス（イタリア人と云われる）がリスボンで海洋学を学

新世界の発見の順序



びスペインのイサベラ女王の援助を得，新大陸発見の糸口を作ったのは1492年であった。いうまでもなく彼はインド洋への航路を開き，財宝を手に入れ，そこに植民地を設ける目的であったが，辿り着いた島を彼はインドと信じて「西インド諸島」と命名した。そこに住んでいた住民をインド人と思いこみ，インディオ（インド人の意）と呼んだのである。コロンブスの探険は3回に及び，中央アメリカ海岸，南アメリカにも達した（1498年）が彼は死ぬまでそれをインドと思い込んでいたといわれ，彼はそこに上陸もせず発表もしなかったので，永い間ポルトガル人のカブラルが1500年始めて南アメリカを発見したこととされていた。

第2節　当時のヨーロッパ諸国

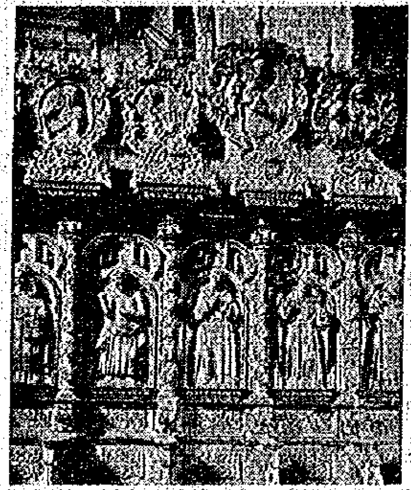
概観　15世紀にスペイン王国は長くイベリア半島を支配していたサラセンを駆逐し，やがて新大陸を発見するに及んでまさに旭日昇天の勢いをもって興隆し世界征服への第一歩を踏み出し，巨額の利益を独占するに至った。当時のイタリアはルネッサンスの前期で文化的にも功績があり，又ドイツもルーテルの宗教革命（1517年）を経て思想的には偉大な改革を行なったが，国家としてはいずれも不統一で封建王国の割拠時代であった。イギリス，フランスも百年戦争（1339年～1453年）のために疲弊し，次いでイギリスでは「ばら戦争」（1455年～1485年）が起りフランスでは新旧キリスト教の争いが続いた。この混乱から最も早く脱却したのはイギリスで，16世紀には産業革命を実現し，エリザベス女王の黄金時代（1558年～1603年）を築き上げた。又1688年にはスペインの無敵艦隊を破り，海上の覇権を握るに至った。この間ポルトガルは大西洋航路の開拓に努め，インド方面への進出には，スペインと競っていた。一時スペインに併合(1580年)されたこともあったが再び1640年独立した。

征服時代　15世紀から16世紀にかけてスペインとポルトガルとの間に次第に激しい植民地争奪戦が展開された。そこでローマ法王アレクサ

ンドル6世が仲裁に入り、カーボ・ベルデ（Cabo Verde）島の西270レグアス即ち西経約45度（現在ブラジル国のリオ・デ・ジャネイロとサン・パウロのほぼ中間）を中心に西はスペイン領、東はポルトガル領ときめるといういわゆるトルデリシアス条約（1494年）が出来上った。（現在のブラジルは当時のポルトガル領よりもずっと西に拡がっているが、この条約によって現在の中南米諸国がスペイン語地域とポルトガル語地域に分かれるきっかけを作ることになった）。1492年から1543年の50年間にわたってスペインは新世界の殆んどの海岸線を探険し、非常な勢いで進出した。又ポルトガル人マゼランはスペイン王の援助をうけ、世界一周を企てフィリッピンに到達したが、南米大陸南端を迂回し途中マゼラン海峡を発見した（1520年）。次いでカリブ海とメキシコのゴルフ沿岸が探険され、次第に新世界のあらましが明らかになりアメリカ大陸はインドとは別の大陸であることが明らかになった。これが端緒となって米西海岸の探険が進められることになった。このようにスペインが未開の航路を開き、アメリカ大陸、カリブ海（西インド諸島）、フィリッピンなどを発見している間に、ポルトガルの進出は終始一貫して前述のローマ法王の裁定に服して、トルデリシアス線の東側に向けられ、1500年アルバレス・カブラルはそこにブラジルを発見した。これよりさきに1498年ポルトガル人バスコ・ダ・ガマはアフリカの南端を廻りインド航路を発見した。元来ポルトガルはスペインに比べて国力も小さく、その民族性も温和であったため、その海外進出も目立たなかったのである。このようにして新世界発見の時代から植民地征服への時代と移っていったのである

植民地経営の始まり

16世紀の初めスペインによって着手されたエスパニョラ島（現在のサント・ドミンゴ島）とキューバ島を中心とした植民初期をカリビア海時代とも呼び、これらの2つの島は南アメリカ進出の重要な橋頭堡の役割を果した。1510年頃からいよいよ征服者の時代に移り、この間に多くの征服者たちが中南米各地の征服を始めたが中でも1520年フェルナンド・コルテスのメキシコ征服と、1533年におけるピサロのインカ帝国征服は歴史上忘れることが出来ない。かくして相次いで植民事業がすすめら



中世紀のスペイン文化のおもかげがのこっている寺院の彫刻

れていった。

これまで述べて来た征服者の歴史が一応幕を閉じた16世紀末から独立までの約300年間が植民地時代と呼ばれている。1600年にはスペインは大陸の殆んどを征服し、植民地を建設した。1574年当時スペインは約200の都市を建設し、スペイン人の植民者の数は15万人を数えるに至った。この時代のスペイン本国の人口は400万人であったのを見ても、スペインの開拓事業が如何に盛んであったかがわかるのである。

ここで注意したいのは新大陸に向かったスペインが当初望んだものは、金、銀財宝の取得であり、又カトリックの布教であった。当時のヨーロッパではルーテルの宗教革命のあと新旧両教が流血の激しい争いを続けた。プロテスタント（新教）運動とともにカトリック（旧教）でも腐敗からの覚醒運動に情熱を燃やした。その中心はスペイン人であり、彼らはその情熱を未開地の開発と原住民の教化運動に捧げたのである。一部の歴史家によると当時のカトリック教を植民地搾取の手先きと論じられることがあるが、それは正しい歴史の見方ではない。

たしかにスペイン人の金銀に対する執念は激しいものがあり略奪的であったが、略奪と神の福音という両面の不思議な並行を率直に見ることが、ラテン・アメリカの歴史を理解する上に重要な条件である。

ブラジルを除く、植民地ラテン・アメリカの天地は本国と植民地の行政機関との2つの支配をうけ、最高統治者はスペイン本国の王であった。これは征服者たちの間にもよく徹底していて探険者が発見あるいは占領した土地は何れもスペイン王の名によるものであった。その土地には中央集権主義による本国の

諸制度が移され、植民地の行政機構としては、国王の代表である副王又は総督が統治し、カトリック教会とその聖職者が補佐機関となった。占領地にはすぐに教会が建てられ、それを中心として村落が作られ、侵略と略奪から次第に定着と統治へと移って行った。

ポルトガルの植民政策はスペインの政策と比べると著しい違いがある。スペインが疾風のような早さで南米大陸の半分を征服してしまったのに反して、ポルトガルは1500年発見、以来約 300 年間は ブラジル を最初「聖なる十字架の地」(Terra da Santa Crus) と名づけ殆んど植民による開拓をしなかった。その理由は種々数えることが出来るが、当時ポルトガルは海外発展の主目標をアフリカとアジアに向けて莫大な富を得ており、更にブラジルの土人は文化の程度が低く求める金銀も得られなかったため魅力が乏しかったからである。僅かにブラジル沿岸一帯に生えていたパウ・ブラジル(赤い木)が良質の染料原料として珍重され、これを伐り出して本国に運んでいた程度であり、この木の名がブラジル国名の由来である。

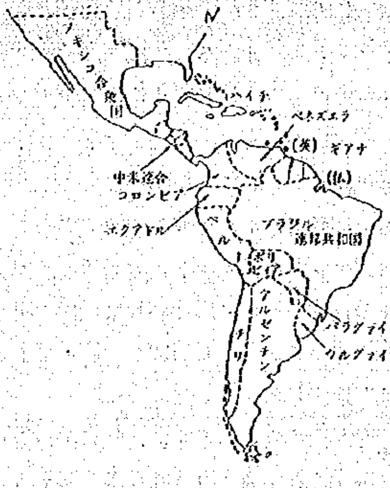
その頃ヨーロッパではスペインがポルトガルを統合した(1580年)ためブラジルもスペインの勢力範囲になったが、再び1640年にポルトガルが独立するとブラジルもスペインから解放された。この間フランス、イギリスを始め海賊船の沿岸侵入が激しくなり、パウ・ブラジルの盗伐がしきりに行われたので、ポルトガルは警備を厳にし、やがて植民を開始することとなり1532年サン・ヴィセンテ(サントス隣接地)に始めて植民地を建設した。

次いで1549年初代総督がおかれ次第に開発が進められ国の北部、北東部、アマゾン流域等に進出し、バンディランテと称する開拓者の群は隊をなしてそれぞれ中央部から北部南部にかけて砂金、ダイヤモンドを求めて勇敢に奥地へ奥地へと進んで行った。これが内奥地の開発の糸口となり、ブラジルが広大な地域を占め、今日の国境の大体の区画が定まることになったのである

第3節　その後の300年間

16世紀に初まった植民地時代が19世紀の前半に至る約300年という長い間ラテン・アメリカ地域はまさに「昏々たる長夜の眠り」をむさぼり一方「混血が絶え間なく進行した」といえるであろう。先ずこの混血について考える前に例外を拾ってみよう。

ラテン・アメリカの独立（1830年ごろ）



即ちアルゼンチンは広漠たる大草原のパンパの連なりであり、そこに住むインディオは遊牧の民であり、この地域にはスペイン人が求める金銀財宝は無かった。他の地方と比べると遅れて植民が始められ遊牧の民であるインディオ達は侵略者から奥地へ奥地へと逃れたため混血が行われず、「白人の国」として残ったといわれている。又チリでは原住インディオが慓悍で勇敢にスペイン人と戦い大部分が死滅し、生き残ったわづかの者は南方に逃れ最後まで征服されなかったため、混血の機会が生れなかったといわれ、コスタ・リカ、ウルグァイも白人の多い国である。このような例外を除いて混血はラ米地域の大きな特徴であり、ここに人種上は勿論、政治・経済・文化のすべてを特徴づけることになった。北米では1620年イギリスの清教徒が信仰の自由を求めて新天地に移住したが、彼らはスペイン人やポルトガル人と違って夫婦者が多く、原住民との混血は少なかった。ところがラ米におけるスペイン人は金銀財を求める荒々しい勇敢な独身の男子が多かったため混血が必然的にすすんだのである。

当時のヨーロッパを眺めてみると、イギリスは18世紀における産業革命の最中であり、一方東インド会社の活躍はめざましかったが主力はアジアに向けられていた。フランスは国内では永い間の宗教争いがつづきその後啓蒙思想が勃興したが、海外進出は主としてカナダに向けられていた。イタリアはルネッサンスの後封建諸侯の争いがつづき統一国家としての力は弱く、ポルトガル、スペインは当時見るべき発展もなく新世界を植民地化したことによって金銀財宝に溺れていたともいえよう。

又地理的にラテン・アメリカに密接な関係を持つ北米は開拓に追われ独立戦争の時代でもあった。このような四囲の情勢下において、ラテン・アメリカ地域は外部の刺戟から遠ざかり、ただスペイン、ポルトガル本国の圧政搾取に苦しみながらも恵まれた風土の中で新らしい混血民族と共に無気力な長い眠りをつづけていた。

しかし18世紀後半に至りスペインの植民開始から遅れること約100年にして始まった北アメリカにおける清教徒の移住者たちはめざましい発展をつづけ、遂に1776年にはアメリカ合衆国13州の独立を宣言するに至った。一方ヨーロッパにおいてはモンテスキューやルソーの啓蒙思想が浸透し1789年にはフランス大革命が起った。これらの大変革はラテン・アメリカ地域の心ある一部の植民地人の中にも次第に浸透し、自由を求める自覚は大きく芽生えつつあった。

第4節 独立から現代へ

ラテン・アメリカに於ける独立運動は云うまでもなく、スペインとポルトガル本国の植民地支配からの脱却であった。独立運動に共通する点は、その主唱者達がいづれも本国からの一時的に赴任して来た役人や出稼ぎの本国人ではなく、既にその植民地に生活の根を生やした植民地人（クリオーリヨ）たちであった。独立を促した要素はいろいろ数えられるが、その内最も決定的な動因をなしたものは本国の圧政搾取に対抗する民主主義思想の勃興であった。その直

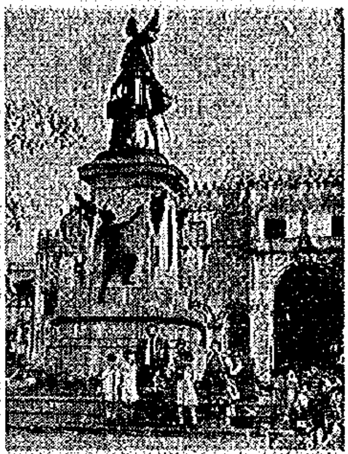
接の動機はナポレオンのスペイン、ポルトガル両本国への侵入によって本国のラ米地域への支配力が衰えたことである。1807年ナポレオンがポルトガルに侵入すると、それを予知したポルトガル王室はブラジルへ逃れて来た。又翌1808年にナポレオンのスペイン侵入によって本国が混乱を来たしたその際に乗じて中南米各地では独立の気運が湧きおこり、次のとおり相次いで独立するに至った。

国名	独立年月日	国名	独立年月日
ハイチ	1804年1月1日	グァテマラ	1821年9月15日
アルゼンチン	1816年7月9日	ホンジュラス	1839年9月15日
ボリヴィア	1825年8月6日	メキシコ	1821年11月6日
ブラジル	1822年9月7日	ニカラグア	1821年9月15日
チリ	1810年9月18日	パナマ	1903年11月3日
コロンビア	1810年7月20日	パラグァイ	1811年8月14日
コスタ・リカ	1821年9月	ウルグァイ	1828年10月3日
キューバ	1898年2月15日	ペルー	1821年7月28日
エクアドル	1830年5月13日	ヴェネズエラ	1811年7月5日
エルサルヴァドル	1841年1月31日	ドミニカ	1844年10月27日

元来スペイン王は植民地の政治に関して絶対的支配力を持ち、本国から直接支配者を派遣して植民地人（クリオーリョ）の政治参画を認めなかった。又当時の本国の政治は腐敗し、その貿易課税等をはじめ重商主義的搾取政策は植民地に対して苛酷を極め、植民地人の不満は極度に達した。この頃富裕な植民地人の子弟はヨーロッパに留学し、進歩的なフランスの啓蒙思想を身につけやがて植民地に帰り知識指導階級となるに及んで自由と平等を求める風潮が強くなり、その素地は十分培養されて本国人と植民地人の対立はますます激化し、ここに独立運動が成功し共和制をしくに至ったのである。又植民地の布教に最も滲透していたジェスイット派をカルロス3世が追放したことにより、彼らがヨーロッパへ帰りスペインの植民地統治を強く攻撃し改革を迫ったので植民地人

の反スペイン的精神の振起を力づけることともなった。ブラジルの場合はやや異なりその独立の思想は一般的にはイギリスの啓蒙思想の流れもうけている。

ナポレオンの侵略をうけたポルトガル王室はブラジルへ逃れ、時の国王ジョアン6世が直接ブラジルの支配者となり、その後ナポレオンの失脚後本国は回復したが、本国のブラジルに対する軽視と干渉に業を煮してブラジルに残っていたペドロ皇太子が先頭に立って1822年独立運動を起し帝政を維持したのである。当時のスペイン植民地における独立の政治思想の基盤は急進的革命思想ではなく保守的色彩が強く、共和制の色彩がうすらいでいたことを知らねばならない。又ナポレオンは大植民地帝国建設の夢を抱いていたが、サント・ドミンゴ島において黒人奴隷の革命がおこり、ナポレオン遠征軍は熱病に倒れ、遂に1804年ハイチは世界史上最初の黒人共和国として独立した。


新大陸への航路を発見したコロンブスの像

ここにおいてラテン・アメリカ解放独立運動の歩みを辿ってみよう。先ずハイチの独立に引き続き1810年ミゲル・イタルゴ神父はメキシコ独立の先駆をなし、中米ではサン・サルバドールを中心として独立運動が展開され、1838年5つの共和国が生れた。南米における独立解放の先駆者はミランダ（1750～1816年）でその一生をラテン・アメリカの独立と自治のため貫いたが彼自身はその光栄を担わずに終った。次いで南米解放の父といわれるシモン・ボリバール将軍（1783～1830年）は1810年カラカスの攻略を皮切りにヴェネズエラ、エクアドルを含む大コロンビア共和国を建設し、次いで英雄サン・マルチン（1778～1850年）と提携し、1826年アヤクチョの戦に大勝利を博してペルーを完全に征服した。

ボリバールの栄光に比べサン・マルチンはアンデスの峻険を越え、チリを征

服しラ・プラタを解放したが政治的権力の座を占めることなく清廉な晩年を送ったことは今でも深く敬慕されている。

前述したとおりラテン・アメリカ地域への植民開始は北米より約100年も古いが、米国の独立はかえって約50年も早くその発展の隔差は大きかった。独立以後のラテン・アメリカ諸国の歩みは300年の長い眠りからさめたとはいえ対外的には相互の紛争が起こり、国内的には相次ぐ革命政争にあけくれ、封建的大地主制度と農奴制の下にあって内部的には民主的発展の契機とならず国土の開拓、資源の開発は取り残され、経済社会の改革も向上も見るべきものは少なかったのである。これが今日に至るまで中南米の停滞性と後進性を示す理由といわれている。又19世紀中期のヨーロッパ諸国は産業革命を経て近代国家へと大きく生まれ変りつつあり、列強相互間の確執はますます激しくクリミヤ戦争（1853年）及び普仏戦争（1870年）等が相次ぎ、一方北米では国内における南北戦争（1861年）があり、ラテン・アメリカ諸国はその渦中から外れた地位にあったことにもよるといえよう。

独立前のスペイン系植民地は4つの副王領と4つの総督領に分かれていた。各国の独立領土は、この王朝時代の区分を基としてこれに地理的、政治的事情が加わって現在の22カ国に分れたのである。その後各国の間には国境画定、勢力均衡、資源確保のための紛争が最近の第2次世界大戦までくり返えされたのであった。その国境問題の大きなものは米国がメキシコからカリフォルニア、テキサス等広大な土地を占領した米墨戦争（1846～1848年）であり、更に、アルゼンチンとチリ（1847年）の争いペルーとエクアドル（1860年）の争い及びパラグァイとボリヴィア（1932～34年）とのチャコ戦争等が相次いだ。又勢力均衡の争いはパラグァイ戦争（1836～39年）でブラジル、アルゼンチン、ウルグァイの3国とパラグァイの戦いがあり、又資源確保については硝石をめぐってボリヴィア、ペルーの連合軍とチリ間に起きた太平洋戦争（1876～83年）等があった。

第一次世界大戦（1914～18年）はラテン・アメリカに目ざめを与え、先ずメキシコは大幅な農地改革を断行して不在大地主や教会の大農園を貧民階級に解

放する一方、米・英の外国資本が支配していた石油権益を接収するなどの激しい改革を行なった。これら進歩的な、かつ激しい社会改革は他の諸国にも強い刺激を与えた。

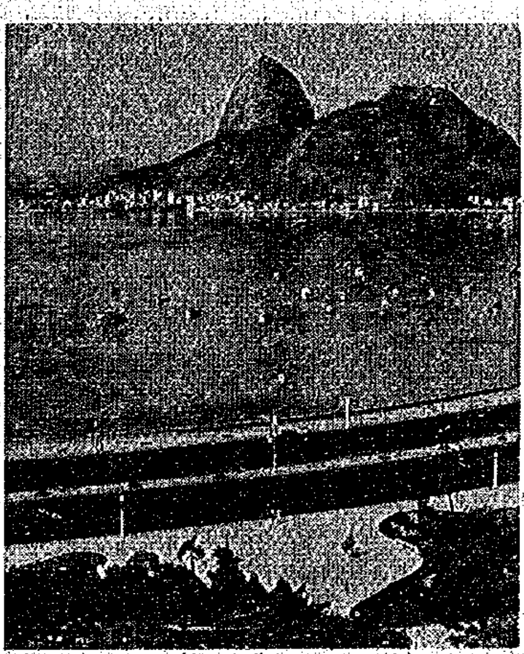
次いで第一次世界大戦に至るまでのこれらラテン・アメリカ諸国は、一応共和制をしき、民主々義国家の形態はとっていたが、政治の実体は依然として長い間支配してきた大地主、カトリック僧侶及び軍人等による一部特権階級の掌中に握られていたのである。しかし乍ら第一次世界大戦による産業の発達と民主々義の風潮は次第に都市労働者や中産階級の商人等の自覚を高め、青年階級や学生等の指導により民衆革命がくりかえされ、次第に近代民主々義国家へと移行していった。

第二次世界大戦以来、ラテン・アメリカ地域における政治的経済的社会秩序は急速に転換を始め、国によって多少異るが次第に民衆による政治的権力の獲得が実現されるに至った。即ち従来の軍部独裁は没落を始め、先ず1956年アルゼンチン国のペロンの失脚、同年ペルー国のオドリヤ将軍の引退、1957年にはコロンビア国のピニリヤ将軍の亡命、1959年にはキューバのバチスタ将軍の国外亡命によるカストロ政権の出現、更に1961年にはドミニカの独裁者トルヒリヨ元帥の殺害が相次いで起こり、各国によって特質はあるがここに全体的にはナショナリズムとデモクラシーの調和した歩みが漸く軌道に乗ってきた。

結論としては、ラテン・アメリカ諸国の後進性は400年の長きにわたって政治の実権を握ってきた大地主の封建性に深く根ざしており政治がそれら特権階級の利益追求に従属してきたことによるものといえる。新しい息吹きは多くの困難を抱えながら国民大衆を背景として広大な国土と豊かな資源の開発に今や大きく進展しようとしているのである。

[illegible]

第 2 部
自　然　と　人



リオ・デ・ジャネイロのコルコバードの丘からポン・デ・アスーカルを望む。

第1節 地 勢 と 気 候

ラテン・アメリカの面積はわが国の約57倍に当たり2,100万km²、人口約2億と推定され、22の共和国と英・伊・蘭3国の植民地がある。

ラテン・アメリカの地形は北米大陸に属するメキシコ、南・北両アメリカ大陸をつなぐ地峡の中央アメリカ、ほぼ三角形の南アメリカ大陸とカリブ海に浮かぶ島々を中心とする西インド諸島の4つの部分に大きく分けられる。

メキシコの北部は北米の西部に連なり、西部に向うにつれて次第に高さを増している。

東西の両海岸ぞいに、それぞれ東西にマドレ山脈（シエラ・マドレ）が走っておりこの両山脈の間は北米のテキサスのように殆んど不毛の砂漠地帯で、その風景は荒涼たるサボテンに象徴される。

この高原の南はマドレ火山脈で区切られ、その山脈にはいくつかの火山が聳えている。

南米大陸は北部のギアナ高地と東西南北に走る海岸山脈とアンデス山脈で縁どられている。アンデス山脈は南米大陸の背骨ともいわれ、コロンビア北部で西アンデスと東アンデスとが合して太平洋岸ぞいに南走して大陸の南部に走っておりその延長は実に約7,000kmに及ぶ。この山脈中に有名なアコンカグア山（標高7,035m）があり、ペルー、ボリビィアの国境約4,000mの高台には面積約11,000km²のチチカカ湖がある。この湖は世界最高の高さに在り、この附近がかってのインカ文明の中心地で当時を偲ぶ遺跡が多い。

ブラジル中部海岸寄りは海岸山脈で高峻な地形であるが、この山脈は大陸の奥地に向かって、次第に山勢をひそめ、北はアマゾン低地に、南はガウチョ（Gaucho）の舞台アルゼンチンの平原に、西はブラジル高原、パラグァイ、ボリビィアに至る大平原へと拡がっている。

世界第一の水量をもつといわれる大アマゾン河は、アンデス山脈に源を発し

東に流れて大西洋に注ぎその本支流はブラジル、ボリビア、ペルー、エクアドル、コロンビア及びヴェネズエラの諸国にわたっている。アマゾン河の外に大陸の東北部を流れるオリノコ河、東南のアルゼンチンから大西洋に注ぐラ・プラタ河等がある。

アマゾンの大おにはす

西インド諸島は15世紀から16世紀にかけてスペイン、ポルトガルが南北大陸探険の拠点で、カリブ海に浮かび、メキシコ湾と大西洋を隔てている大小のアンティリヤス列島とバハマ諸島等である。この列島には山岳が多く、特に小アンティリヤスには火山が多い。

ラテン・アメリカ地域の大部分は熱帯圏に属し、22カ国のうちの16カ国は国土の大部分が熱帯圏にある。6カ国は熱、温両帯にまたがっている。赤道は南米大陸の北部、すなわちアマゾン本流の上流、コロンビア南部からエクアドル(Ecuador=Equator(英)赤道の意味)を貫いているが、パナマ地峡及び中米地方が最も暑い。南米大陸のうち、大西洋方面は東北部は東北、東南の貿易風をうけて低地は比較的涼しいが、アマゾン地方とブラジル中部の海岸山脈の外側、即ち大西洋沿岸地帯は高温多湿である。

太平洋岸はフンボルト海流の影響で緯度の割合に涼しく、特にエクアドル南部からペルー、チリの北部は雨量が極めて少ない。アンデス高地、ギアナ台地、ブラジル高原も緯度の割合に寒冷で、例えば海抜800mのサンパウロ市の夏は東京の夏よりも遙かに凌ぎよい。

ラテン・アメリカの気候は次のように大体8つの型に分けられる。

1　アマゾン盆地、エクアドルの一部からパナマにかけての地峡地帯や、メキシコのユカタン半島、ホンジュラスのカリブ海寄りのジャングルの多い熱帯性の高温多湿地域。

2　地峡の太平洋寄りの地域、ギアナ台地、ブラジル高原のような草原地帯の

高温多湿の地域。

3　ペルー太平洋岸一帯、ブラジル北部のセアラ州のような熱帯性砂漠（カチンガ）地帯。

4　ブラジルのサンパウロ州以南、アルゼンチンのパンパス地帯にわたる湿潤な亜熱帯地帯。

5　アルゼンチンのパタゴニアからアンデスの東側地域の乾燥地帯。

6　チリの太平洋岸ぞいの地中海性気候地帯。

7　アルゼンチン南部の海洋性気候地帯。

8　アンデス高台の山岳性気候地帯。

第2節　経済の基礎的条件

ラテン・アメリカは、いわゆる後進地域といわれているが、その原因には次のような事柄があげられる。

1　大部分が熱帯性の高温多湿の地で特に白色人種の活動に不適とみられていたこと。

2　地形が複雑で交通不便であること。

パナマ帽を編む主婦

3　エネルギー源である石炭の産出が少ないこと（石油の産出を見たのは殆んど第二次大戦後のことである）

4　人口が少なく人種が多様であること。（最近の人口増加率は世界最高である）

5　政情が不安定であること。

6　欧米諸国の経済的支配力が強大であること。

これらの事由は自然的、社会的、政治

的条件を含んでいるが、広大な土地と豊かな資源に恵まれながら経済開発がおくれ、後進地域として取り残されてきたことは社会的、政治的事情が大きいといわねばならない。

ラテン・アメリカ経済の基礎となっているのはまだ農牧業生産で、特にブラジル、アルゼンチン、ウルグァイ、コロンビア、エクアドル、パラグァイ及び中米の諸国はそれぞれコーヒー、羊毛、棉花、肉類又はバナナ等の熱帯果実の単一生産に依存している。

ヴェネズェラ、ペルー、ボリビィア、チリ、メキシコなどは豊富な鉱物地下資源を持っているが、その生産形態も単一的であり、特に外国資本によって開発され支配されているものが多い。

しかし、一般的に第2次大戦中から戦後にかけて各国とも従来の生産性の低い農業から、より効率的な工業生産へとその経済構造の転換に努力しているので今後の経済的基礎条件は大きな変化を見ることになろう。

第3節　混 血 す る 人 々

第一部に述べたとおり、現在この地域の住民の特徴は混血人種を主として社会を形成し、人種が複雑多様であり、世界最大の混血地域といわれることである。白人の国といわれるアルゼンチン、チリ、ウルグァイ、コスタ・リカと黒人が90%以上を占めるカリブ海のハイチを除けばインディオと白人の混血が多数を占めている。

最近の人種分布は別図のとおりであるが、この人種分布の由来については気候風土による自然的条件と歴史的条件が考えられる。

歴史的にはいろいろあるが、メキシコ及びペルーの2つの古代文明地へのインディオの密集と黒人奴隷の輸入及び19世紀におけるヨーロッパ人を始めとする外国移民の大量導入等によるもので国別によって事情は異なっている。

更にこの地域の特徴は最近世界最高の人口増加率を示していることである。

1920年から1960年に至る40年間に人口増加率はアジアの68.4%、アフリカの67.6%に比べラテン・アメリカは実に126.3%で、文字通りの爆発的増加を示しており、経済発展への最も大きな圧力となっていることである。加えてこれら人的資源の質的向上も大きな課題で、各国とも文盲撲滅をはかり教育に力を入れている。

大きく分けて白人、インディオ、黒人及びこれら3種の混血による6種類の人種構成から成立ち若干のアジア人（日本人、中国人）が加わっている。

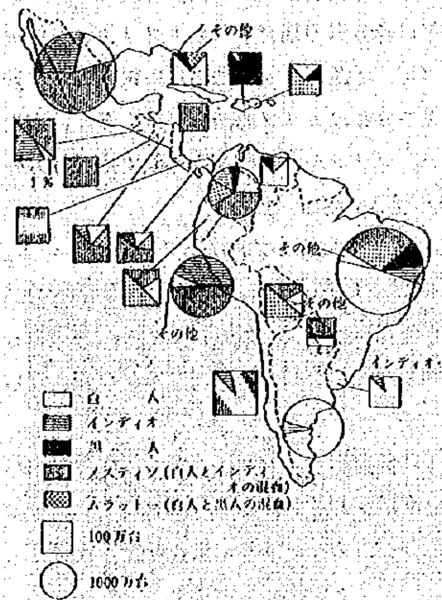
白人　ラテン・アメリカの名にふさわしく、この地域はラテン民族その中でもラテン・アメリカの主人格はスペイン人であるが、スペイン人でも一様ではなく本国の各地方の出身者があり、特に新大陸の発見と開拓に勇敢に乗り込んだのはカスティリア人であった。

カスティリア人はいわゆる最もスペイン的であり、スペイン人の情熱、狂信的なカトリック、特にイベリア人が主力である。イベリア人はヨーロッパの西端イベリア半島に分布するスペイン人、ポルトガル人の総称で、人種的には地中海人種で、ヨーロッパの北方人種であるゲルマン民族とはいろいろな面で対照的である。北欧の内省的に比べ、南欧は情熱的であり、さらに宗教においても北欧のプロテスタントと南欧のカトリックの相違を表わすものであろう。

イベリア人のうちでも、特にスペイン人は信仰と異常なほどの黄金への執着の特性を持っていた。カスティリアは10世紀から11世紀にかけて、アラビア人の支配下にあり、広大なサラセン文化の中にあったイベリア半島をヨーロッパ人の手に奪回した西ゴート族が築き上げた王国であった。その熱烈な十字軍精神と国民的誇りの騎士道精神は中世騎士の範とされていた。そのようなカスティリア人の冒険心とキリスト教信仰の情熱がカスティリア的エネルギーによるものと云えるであろう。この精神は12世紀に独立したポルトガル人の血の中にも流れているが、ポルトガル人はスペイン人に比べて一般的に温和であり、より現実的であったといわれる。

19世紀後半から白人の第2回目の大陸征服といわれた大量のヨーロッパからの移住者は、特にアルゼンチン、ウルグァイ、南部ブラジル、チリなどの温帯

ラテン・アメリカ人種分布図



地域に多く、そのうち最も多かったのが同じラテン民族であるイタリア人であった。

20世紀初頭、特に第一次大戦以後はヨーロッパ各地からの移住が盛んに行われたが、そのうち特に北欧ドイツ人の移住が激増し、チリ、ブラジルなどにおいて次第に経済、社会面に重要な地位を占めるに至っている。

〔インディオ〕 既に述べたようにインディオ（Indio=Indian(英)）の語源はコロンブスが新大陸を発見した当時、インドと誤認したことから始まっている。

北米と違って、ラテン・アメリカにおけるインディオの社会構成上の比重は重い。

この地域において彼らの人口が多く、概して文化的にも高い水準にあったということが大きな理由である。彼らの種族は多様で言語、宗教、生活様式等も異なりその数は15世紀初めに約1,550万と推計されていた。そのうちの約450万がユカタン半島周辺に、約610万がアンデス地帯に分布してそれぞれマヤとインカの二大文明の中心地域に住み、他の広大な地域に残りの約490万人が分散していた。

この約490万人の種族を分類することは殆んど不可能といわれ、例えばアマゾン地方だけでも600余の種族がいたといわれるほどである。この490万のインディオは極めて原始的で文化を持たない無知の群集に過ぎなかった。

これら純粋のインディオは無知なるが故に不摂生であり、又300年間にわたる植民地時代に白人から迫害酷使され、高地やジャングルの奥地の中で孤立し

た生活をつづけ数千年も変らぬ彼らの伝統的生活風習を守りながら急速に消滅しつつあるが、現在では各国ともかれ等の保護政策を取っている。

ニグロ（黒人） ニグロは1510年以降労働力補充のためアフリカから奴隷として主としてブラジル及びカリブ海諸島に輸入され、鉱夫や農奴として働かされていた。現在の分布はカリブ海諸島が最も多く、南米大陸の南部は気候寒冷のために少ない。ブラジルでは約300年間に約300万の黒人を輸入したが、1850年黒人奴隷の輸入が禁止された。

現在ラテン・アメリカ地域における黒人の数は僅か約80万人といわれている。

ニグロは一般に文化、生活の程度も低いが、先天的に政治的、経済的能力が劣るとはいい得ない。彼らの中からも優れた学者、芸術家を生み出しているが、一般的には3世紀にわたる奴隷制度が彼らをして無知、怠惰、卑屈に陥らしめたというべきであろう。

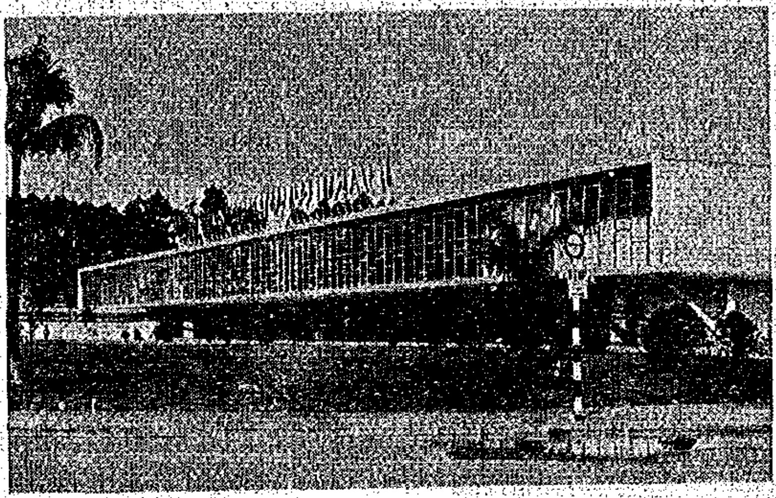
混血 ラテン・アメリカにおいては前述したとおり、一般的に広く混血が行なわれ、これが複雑な社会構造を形成し、中でも白人とインディオの混血であるメステッソが住民の大部分を占め社会的にも重要な役割を果している。

このメステッソも土着インディオの種族の違いによって多様であり、例えばブラジルではポルトガル人とグワラニー族との混血マメルコ、ペルー、ボリヴィアではケチュア、アイマラ両族とスペイン人との混血であるコロスというぐあいである。

政治的指導者であったヴェネズェラのパエス、ペルーのカスティリア、メキシコのディアス、ボリヴィアのサンタ・クルース等はこのメステッソであり優れた指導者が数多く出ているが混血の中にも無気力、無感動、そして享楽主義の種族も数多い。

この他に白人と黒人の混血（ムラト）、インディオと黒人の混血（サンボ）があり低階級社会の大部分を形成している。

第3部
社会と文化



サン・パウロ市イビラプェラ公園の中にある産業会館

第1節　スペイン系とポルトガル系の相違

ラテン・アメリカにおける文化は北米大陸とは全く異なつており、その母体をなすのはイスラム文化とカトリック教的文化との強い影響をうけているイベリア文化であり、それがスペイン，ポルトガルの植民地建設とともにイベリア半島から移植されたものである。新大陸の熱帯，亜熱帯的気候風土の中で、それぞれの植民地に多種の混血種族を生みながらラテン・アメリカ固有の文化が誕生した。

植民地時代の300年間は，イベリア文化の影響が最も濃かったが，他のヨーロッパ文化も次第に流入し，特に18世紀以降においては，フランス文化の影響が最も強かった。即ち，世界史上新しい画期的時代をもたらしたフランスの啓蒙思想は強くこの新大陸に影響し18世紀後半に入ってから，ヨーロッパ諸国の科学者がこの新天地に渡り，又新天地からも富裕な植民地人の多くの子弟が留学し文化の交流が活発に行なわれるようになった。

情熱的な民族舞踊をおどる若者たち

このようにラテン・アメリカ文化は400年の流れの中でラテン系ヨーロッパ文化を基調として原住民文化と混淆し，独特のラテン・アメリカ文化を生み出した。

一般にラテン・アメリカの諸国民は，彼らの持つ文化がヨーロッパ系文化であることに誇りをさえ抱いている。スペイン人はそれぞれの出身地の特色を持ち込み，同郷人が集団する傾向にあったので，次第にそれぞれ郷土色の濃い文化も生まれ，その地方的文化がやがて政治上の障碍にもなり，

スペイン系植民地がそれぞれに分れて独立する一つの遠因にもなった。

ポルトガル人は一般的に現実的であり、協調性に富んでいたのでブラジルは分裂もなく一国として発展してきたが、領土が広大なために国民の気風、習慣も全く同一ではない。大ざっぱには北東部、特にセアラ人は転住性があり、ミナス・ジェライス州は保守的、リオは陽気でサンパウロは勤勉という特徴が見られ各地域によって文化的色彩にも多少の特徴がみられる。

第2節　スペインとポルトガルの影響

芸術

ラテン・アメリカの文化はこれら異なった血と文化的背景を持つ人々の色どり豊かな各種の文化の総合が特徴であるが、植民地時代の文学はスペイン，ポルトガル本国の影響が支配的であった。19世紀にはフランスのロマンティシズムの影響を、又19世紀末にはレアリズム文学も伝わり，大体においてヨーロッパの模倣が多かった。現在でもヨーロッパ文学の思想が強く影響し、支配しているがアルゼンチンにおけるガウチョ（牧童）文学等特色あるものも生まれた。そしてフランス文学が母国の文学とともに知識階級に親しまれ、1945年チリの女流詩人ガブリエラ・ミストラルは最も優れた詩人としてノーベル文学賞を授けられた。

音楽の分野ではアフリカ黒人のもたらした舞踏と音楽のリズムは同様に強烈なイベリアの音楽と融け合い、新らしい魅力的音楽を生み出し、又インディオ固有の音楽も親しまれている。メキシコの代表的民謡であるボレロやカリブ海諸島のマンボ、メレンゲ、ブラジルのサンバなどはニグロの陽気なアフリカ的リズムであり、庶民の間に生れたミロンガ、タンゴはアルゼンチンにパラグァイでは土着のグアラニーとラテン音楽の調和された特色あるガローパ音楽が盛んである。これらは弦楽器と打楽器が使われハープは一つの特色である。

又インディオは土器の民芸品や織物に西欧の技法をとり入れて伝統的スタイルを保ち続けている。

日本人の民族性を知る上に仏教や神道を除外することができない以上にラテン・アメリカを理解しようとする場合カトリック教を忘れることはできない。

宗教

スペイン、ポルトガルの帝国主義的発展の標語は「剣と聖書」であったことは前述したとおりで、植民地経営について第一の課題はインディオの信仰する「邪教」を改宗させ、神の福音を与えることであった。征服者たちの中にはインディオを徒らに迫害虐待した無法者も少なくなく、宣教師たちはそれらの征服者たちとも斗争しなければならなかった。又一方宣教師たちは、人跡未踏の蛮地にインディオを訪ねて神の教えをひろげ、まさに献身的超人的伝導をつづけた。ペドロ・クラベルは黒人保護の聖者として、ジョゼ・デ・アンシェッタはブラジル土人の救い主として、又ヌラス・カーザスはインディオの保護者として後世に讃えられている。

元来1517年のルターの宗教革命のあとプロテスタントとの激しい抗争関係にあったカトリックは新大陸を独占するため異常なほどにプロテスタントを排除し、ラテン・アメリカ全土にカトリックの布教網がしかれ社会福祉慈善や教育事業もすすめられ、原始的未開地に慰安と文化が与えられた。

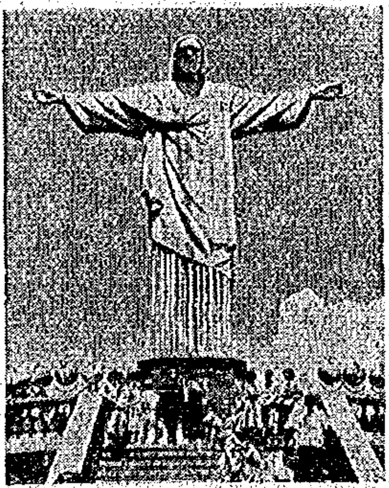
カトリックの信者は年々増加し、教会は植民地統治者の援護も受け、広大な農園や鉱山等も経営してその社会的勢力は尨大となり植民地統治者のごとき観を呈するほどであった。

特にジェスイット派の活動はめざましく、1740年頃にはパラグアイその他に多くの布教村を設け、インディオを保護教化し、尊敬をうけていたが他派教会の嫉みも加わり、インディオ奴隷化に関する統治者との対抗が激化し、遂に1767年新大陸から追放されるなどのこともあった。

19世紀に至り、ラテン・アメリカ諸国が独立するに及んで宗教と教育は分離され、本国からの庇護は失われカトリックの独占的支配は次第に制約されてきた。特にメキシコにおいては、政府と教会の激しい抗争がつづき社会の動揺を引き起こした。又大地主や一部軍人と結んで政治社会の支配層化した一部教会に対する反感も強まった。

しかし、カトリックはラテン・アメリカ民族の伝統的宗教であり、又精神文

化の支柱であることには変りはなく、その信仰は国民の日常生活の中に深く滲透しており、ラテン・アメリカ社会の精神的背景的勢力として大きく貢献している。


リオのシンボル、コルコバードのキリスト像

教育　カトリック教はラテン・アメリカの文化を進めた原動力であり、教育は宗教と密接に結ばれ、植民地時代には国民の教育は教会によって行なわれ教育の内容は文学、古典語、哲学、神学等の人文科学を主としたものであった。

植民地時代の社会の特色は支配者階級と下層階級との間に甚だしい格差があり、教育と文化生活は白人の貴族、大地主等の特権とされ、貧民やインディオやニグロは全く恵まれずこれが現在でも文盲の多い原因となっている。植民地統治が進むにつれて副王、総督も次第に教育の普及につとめ、この時代に12の大学がラテン・アメリカに建てられた。

最古のものはドミニカのサント・トマス大学（1538年)、メキシコのサン・パウロ大学（1551年)、ペルーのサン・マルコス大学（1551年）等である。教育科目も従来の人文科学を主としたものに、医学、鉱物学、植物学、化学、天文学等が加えられた。これらの大学は、いずれもカトリックと密接な関係があり、大学はその地域の文化の中心であった。各国の独立後は学問も次第に一般化し、又水準も高くなり、広く教育の門戸は開かれた。義務教育や普通選挙も行なわれるようになり、図書館、博物館等教育施設も逐次整備されてきたが、現在でも初等教育の普及は遅れ、この地域の文盲率は極めて高い。各国とも文盲退治を国の重要政策の一つとして積極的に力を入れている。

言語　ラテン・アメリカ22カ国のうちスペイン語系は18カ国、ポルトガル語系は1国、英語系2カ国、フランス語系は1カ国である。これらの国

語はラテン・アメリカに移されてから地理的、人種的影響を受けて母国語の純粋な形からは変化しており、更に言語学的には外来語（イタリア語、英語、ドイツ語等）の影響をうけている。インディオ語の影響はスペイン語系、ポルトガル語系ともに強く、動物、植物、鉱物名や学術用語等に特に多い。パラグアイではスペイン語のほかにインディオ語が国民全体に広く使用されている。

16世紀ポルトガル人が、日本に来航したがその名残りとして多くのポルトガル語が日本語化しているのは興味深い。例えば、コップ（copo)、ビロード（veludo)、合羽（capa）などである。

風俗と生活 メキシコ、中米、アンデスの山岳地帯には古いスペイン風の風習とインディオの特殊な風習が残っている。その服装は質素で男女共よく帽子をかぶり、又ブラジルのバイア地方の黒人女性にはアフリカ風の濃い原色の服装、動物の牙や木の実で作った耳輪、首輪や腕飾りをつける風習が残っている。アンデス高原のインディオの女性が好んで用いる赤系統のスカートの布地はメキシコでは極彩色の肩かけに用いられている。ラ米地域の大多数は前述のとおりカトリック教徒で、宗教上の儀式や祭礼には熱心で信仰心があつい。ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市の謝肉祭（carnaval）はその豪華さで世界に有名である。

一般にラテン・アメリカ人気質として「陽気でのんびりしている」といわれているが、都会生活においては既にその時代は去りつつあるといえるだろう。植民地時代の一般の住居はスペイン風のものであった。その典型的な建て方は平家で壁は簡単な方法で粘土をかためて焼いた煉瓦を用い、尾根は赤瓦ぶき、家の中央に中庭を設け、周囲には廊下をめぐらし家の正面は白壁でぬり、前には石だたみの歩道を作り2階、3階建ではバルコニーを設けている。このような建物はラテン・アメリカの植民地時代の古い都市や村落に残っており、現在でもその形式は建築の中に加味されて生きている。

インディオの石造文化による神殿、ピラミッドが優れていたことは歴史上明らかであるがこれに対してカトリック教会は、その地方の中心地で風光に富む場所を選んで豪壮な寺院を建築したが、これに伴って宗教画が発達し彫刻も宗

教的なものが多く、これらにインディオ文化の影響が強く表現されているのが特徴である。現代では都市においては近代的高層建築が建てられている。

スペイン人は遠くギリシャ人やヘニキヤ人がイベリア半島に住んだ時代から都市生活を好んだ民族で、新大陸に移っても新しい町には先ず中心部に教会、政庁、兵営、広場を設け、そして市街地を作った。都市は教会、修道院、神学校などを中心として発達し、宗教団体の都市計画に基いて「神の国」建設の理想の下に作られたものが多く、これは新大陸の１つの特徴であろう。

都市にすべてが集中するのは自然の傾向ともいえるが、ラテン・アメリカのように首都と地方の格差が甚だしいのは他に類が少ない。近年地方の開発をすすめるためにも人口の分散をはかることが痛感され、道路交通網の整備とともに地方文化都市の建設がすすめられている。

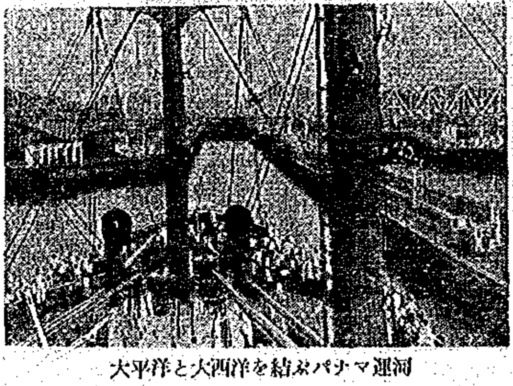
第 4 部
政治と国際的地位

アルゼンチンの解放者サン・マルチンの像

第1節 概　　　観

ラテン・アメリカ諸国がそれぞれ本国から独立して、およそ150年を経た現代においては、ラテン・アメリカ特有の革命を繰り返しながらも民主政治を基調とする近代国家への成長脱皮の努力がつづけられている。

独立後、永い間繰り返えされた政局の不安は、政治，社会の構造を変革する革命ではなくして、一種の権利をめぐる政権交替の争いであった。一部の土地貴族である大地主が政治の支配権を握り、これに教会と軍部の提携による封建的独裁政治体制が支配したためである。これは封建的大地主制の下において一部の特権階級に従属する経済構造に深く根ざしており、大衆は政治的恩恵に恵まれず、政治的偏向は著しかった。このような政治形態は次第に許されなくなり、第一次大戦後の激しい世界の動きの中にあって，民主主義思想は伸展しつつあり、大衆のめざめとともに、社会主義、共産主義勢力の滲透も加わり次第に中産階級と労働者階級の社会的政治的勢力は拡大しつつある。これらの思潮の中で更にナショナリズムの急速な勃興を見逃がしてはならない。これは多くの異なった社会意識を持つ外国からの移住者及び混血が大部分を占める人種的複雑多様性を考えるとき国民として自覚を高め、社会連帯意識を鼓吹することは当然のことと考えられる。



大平洋と大西洋を結ぶパナマ運河

この強いナショナリズム運動とともに一方では前述した国内の経済開発と工業化に伴なう先進国からの技術と資本の援助を必要としており、そこに国家主義と国際協調主

義の対立が生まれ、これが封建的残滓からの脱皮とともに、これら諸国が包蔵している苦悶であり、政治的特徴といえるであろう。

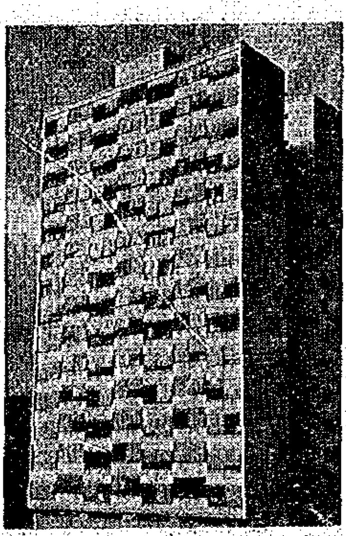
第2節　米国との関係

ラテン・アメリカ諸国が地理的にも歴史的にも米国と最も密接な関係を生じたのは1820年前後である。文化的にはフランスの影響を強く受けたが、国際政治の面では最も緊密な関係は米州機構にある。これを北米側から見ると新世界の指標をなしたモンロー主義であり、ラテン・アメリカ側から見れば汎米主義である。一般に汎米主義は、米国とラテン・アメリカとの文化、経済、政治の連合、協同関係を促進する運動またはその主義と定義されている。

汎米主義の歴史は、1823年に発表されたモンロー宣言に初まる。モンロー宣言はヨーロッパの米州への不干渉と非植民地の原則と米国のヨーロッパに対する非干渉を含むものであったが、これはアメリカの一方的な主張であったため国際的には認められなかった。次いでラテン・アメリカ諸国はヨーロッパからの脅威を防ぎ米国との協力関係をすすめるため、1889年の第1回汎米会議で、「米州連合」が結成されたのである。この会議でルーズベルト米大統領はモンロー宣言を拡えて「米国はラテン・アメリカ諸国の出来事について干渉する責任と義務をもつ」旨を発言し、武力を背景とするアメリカの積極的干渉が露骨となりパナマ運河建設への進出を始め活発化した。

このようなアメリカの高圧的態度はラテン・アメリカ側の反感をつのらせ、第1次大戦後の国際情勢からフランクリン・ルーズベルトの「善隣政策」に変ったが、その後もアメリカは「西半球の平和と安全を保証するための集団干渉は強化したい」と宣言した。

1948年には米州機構を形成し、「従来の米州連合」の動きは「西半球の協同防衛」という軍事的性格に変わり、これに反して米州連合を通じて、まず自国の経済発展をはかろうとするラテン・アメリカ諸国との利害は対立して、ルーズ


最近の中南米では地方都市にも近代的なアパートが建設されている

ベルト大統領の善隣政策によっても好転しなかった。

第二次大戦中に「相互援助協定」が生まれたが、それはより強い軍事的性格を帯びたもので、更に戦後、1948年コロンビアで開かれた第9回汎米会議において「米州機構」ができ上った。1958年ブラジルのクビチェック大統領が提案した「オペレーション・パン・アメリカ」の構想から米州開発銀行が設立され、開発資金が不足するラテン・アメリカ諸国のために好感を以って迎えられた。

このように米州機構は、現在米国において国際協力の広い活動分野をもち、かっての「米州連合」より大きく成長し、軍事的協力から経済的、政治的協力へと大きく変ったのである。

米国のラテン・アメリカ政策はモンロー主義以来のものであるが、米国が世の一大勢力国家としての実力を備えはじめると、スペインやポルトガル及び界イギリスに代ってこの地域に経済的進出を企てるようになった。同時にそれは米国資本の権益を守り共産主義勢力を排除することでもあり、しばしばラテンアメリカ諸国民の反米感情を刺激した。元来、米国民間資本の主な対象は、中米、カリブ海諸国であったが、それらの諸国は投資対象として政治的に不安定であり、従って継続的投資の危険も伴ったのでアメリカは「モンロー主義」の名の下に中米、カリブ海諸国を今世紀の初期まで直接米軍の支配下におさめたことがあり、現在もなお根強い反米感情が残っている。

第二次大戦後間もなく、東西両陣営の対立が露骨となり、米国は米州の安全を目的とする米州機構をつくり指導的地位を確立したかに見えるが、最も経済発展を欲求するラテン・アメリカ側においては最近に至って特に不満の声が開

かれるようになった。それは米国が荒廃したヨーロッパ、アジアの再建に力を入れ、ラテン・アメリカに対する援助が十分でないという非難であった。

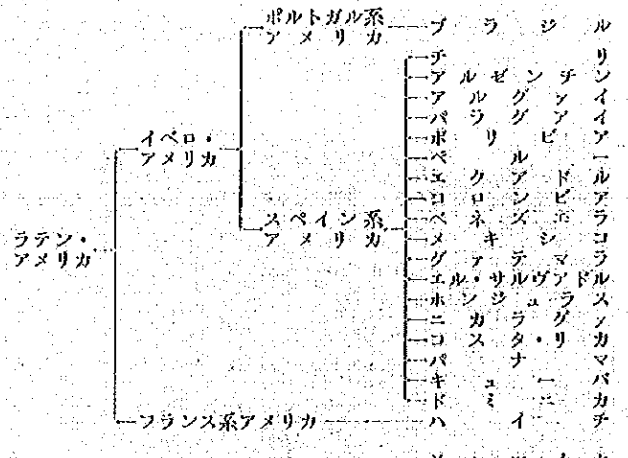
その後1961年ケネディ米大統領は「進歩のための同盟」を唱え積極的援助策を打出し現在に引継がれている。

第3節　ヨーロッパとの関係

かってラテン・アメリカ諸国の母国であったスペイン，ポルトガルは現在経済的関係においては何らの影響力も持っていないが、同じ国語と文化を持ち、又国民の大部分はイベリア系であるため、文化的関係は今なお根強い。フランスはかってメキシコを侵略したことがあるが、フランス語国であるハイチはもちろん、ラテン・アメリカ諸国において文化上の敬意を払われている。

イタリアは南米の南部、特にブラジル、アルゼンチンに多数の移住者を送っており，人的関係はスペイン、ポルトガルに次いで密接で、これらの国におけるイタリア系人の経済活動は活発でその力は非常に高い。

人種別表



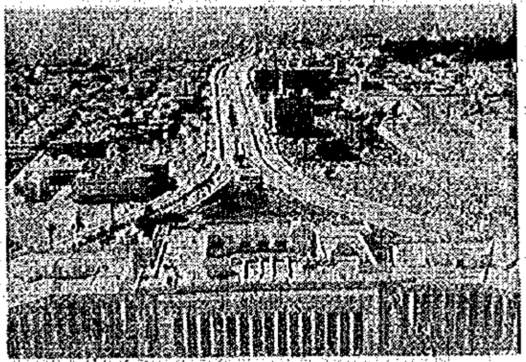
イギリスは特にアルゼンチンに多額の投資を行ない運輸、通信等の企業を経営してきたが、第2次大戦後は著しく後退した。ドイツは第2次大戦後も戦前に

劣らず盛んな経済活動を行ない、又重工業方面への企業進出を行なうと共にドイツ人移住者は堅実な発展を続けており主としてブラジル南部諸州を始めパラグァイで活躍している。

カトリック教がラテン・アメリカ諸国民の精神的支柱となっていることは既に述べたとおりで、ローマ法王庁はカトリック教徒の心のふるさとであり、ラテン民族と法王庁との精神的紐帯の強さは、他の諸宗教において見られない程のものである。

第4節 共産圏との関係

ラテン・アメリカと共産圏とは地理的にも、歴史的にもその関係は比較的遠いものであった。ラテン・アメリカの征服がスペイン人、ポルトガル人によって完成され、その後文化的にはフランス、イタリアの影響を強くうけ、現在では経済面で米国の影響を大きく受けているが、見逃がせないものにロシア革命の影響がある。共産主義はアルゼンチン、ブラジル、チリなどにおける政治の動揺、不安定の原因にかなり大きな力となっており、カストロのキューバ政権獲得により大きな衝撃を与えた。

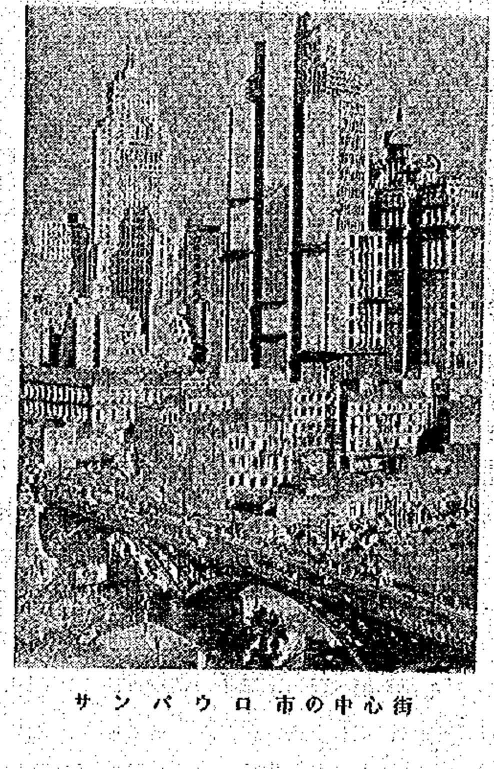

キューバの首都ハバナ市

ソ連は長期にわたって共産主義思想の漸進的滲透を図っており、ウルグァイは国際共産主義宣伝の戦略拠点になっている。現在ラテン・アメリカ諸国のうち中共を承認しているのはキューバだけであるが、共産主義政党が合法的に認められているのはアルゼンチン、

ボリビィア、チリ、キューバ、コロンビィア、エクアドル、メキシコ、ウルグアイ、ベネズエラである。

経済開発と工業化のための資本に悩むラテン・アメリカ諸国が共産圏との貿易援助を期待するのは当然であり、アルゼンチン、ブラジル、ウルグァイ、キューバを始め対共産圏貿易は次第に増加しつつある。ラテン・アメリカ諸国における共産主義の勢力は全体的には強大なものではないが、経済的後進性と民主政治へのめざめによって社会改革への気運は大衆運動として今後とも大きく動くであろうことが予想され、それらを土壌として共産主義活動の温床が包蔵されていることを注目しなければならない。

第5部
経済の動向



サンパウロ市の中心街

第1節 単一生産から多角化へ

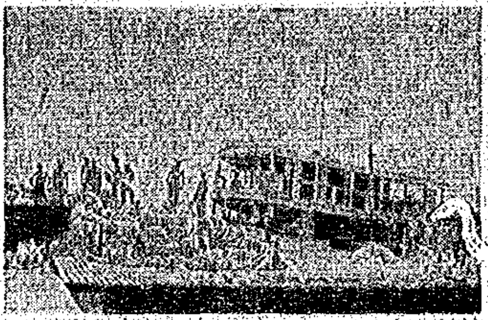
ラ米地域の経済は農鉱業の単一生産（Monoculture）を基調とする前近代的経済体制の下に永い間支配されてきたといえよう。今や相次ぐ政治的混乱の中から社会改革への要請は必然的におこり、これに伴なって新らしい経済体制への改革脱皮が急務とされている。ここに経済開発による産業の多角化特に工業化はラテン・アメリカ諸国にとって最も大きな課題であり自立経済成長達成への努力がなされつつある。

ラ米諸国の農業人口は全体の60%以上を占めながら農地の80%はわづか1%の地主によって所有されており、農鉱業の生産は単一的であることが大きな特徴である。即ちブラジル、コロンビアのコーヒー、キューバの砂糖、ベネズエラの石油、ボリビアの錫等はその典型である。又この地域は殆んどが農業国であり、広大な土地を持ちながらアルゼンチン、ウルグァイを除けば食糧の自給すら出来ず、輸入に依存している国が多く、農業生産性は低く開発がおくれている。

このような原因は遠く開拓当初に根ざしている。元来スペインの征服者たちが、「われわれは農夫のように働くためにやって来たのではない」と言っているように、金銀財宝を求めて渡って来た冒険家たちであって北米の開拓者の多くが兇暴なインディアンや荒々しい風雪と戦いながら真剣に土地を耕して新天地を建設して行ったのとは極めて対照的である。勿論米国でも西部におけるゴールド・ラッシュの狂躁的時代を迎えたこともあったが、金銀を求めることのみが目的ではなく、それは副次的なものであった。北米開拓者の多くが地道に深い信仰に支えられながら西へ西へと開拓の斧を進めている時、ラテン・アメリカでは金銀から砂糖に、棉からゴムに、コーヒーにと次々投機的農産物を追って略奪的営農をくりかえし、単一生産という危険な道を歩んできた。ブラジルにおいて多角的営農を創始したドイツ人と日本人の移住がなかったならば、

この習性は更に長く続いたこととと思われる。

ラテン・アメリカの農業がこのように不安定な投機的換金作物を求めてさまよい、大地主が封建的制度の上に安座している間に、北米では開発はすすみ産業革命と近代的工業化を達成したのである。



日本人の移住地パリンチンスからジュート麻の積込み

ラテン・アメリカが単一生産によってコーヒーや棉を輸出し、それと交換に工業製品を輸入するという植民地的経済にあぐらをかき技術革新と近代化を怠った結果は、現在においても経済開発がおくれその後進性を示すことになった。ラテン・アメリカの主要な一次産物は石油、コーヒー、砂糖、棉花、羊毛等であるが、石油、コーヒー、砂糖が全輸出額の過半を占めており、石油を除いたコーヒーと砂糖はラテン・アメリカに限った産物ではなく、常に国際的な生産高と価格の変動に大きく左右され、これらを主産物とするラテン・アメリカの経済は不安定であり、貿易の好不況の影響を強くうけることは明らかであった。

このような単一的農業産品に依存することはこの地域ばかりでなく、後進国

ラテン・アメリカ100大企業

（1969年売上高順――Mc Graw-Hill）

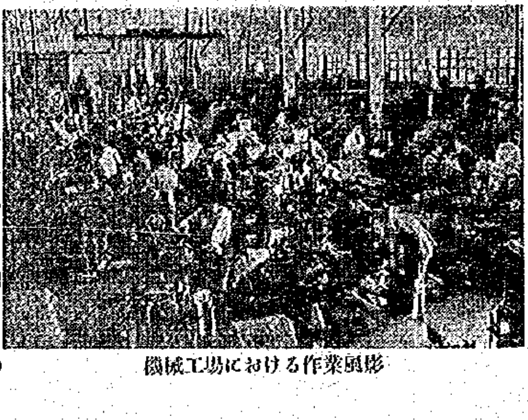
業種別	数	国別	数
石油	19	ヴェネズエラ	25
鉄鋼	9	アルゼンチン	18
繊維	9	メキシコ	18
ビール，飲料	8	ブラジル	13
自動車	6	チリ	9
紙	6	ペルー	9
金属	4	その他	8
煙草	4		
その他	35		

経済に共通の特性であるがこれを打開するためには、その埋れた未開発資源を開発し、産業を近代的に多角化し、特に工業化を推進するとともに流通面における共同市場の結成等が必要である。

又、ラ米諸国共通の課題は封建的土地制度と外国資本の支配であり、これらの旧体制の経済構造を打破し改革することが急務とされている。1935年代のメキシコ、ボリビアにおける農地改革運動は社会改革へと発展して未解決の問題を残しながらも一応達成され、キューバのカストロ政権が行なった農地改革の断行は大きなショックを与え、ブラジルにおいても数年来農地改革が叫ばれている。封建的土地制度の改革はこれに連なる社会構造の改革へと繋ながり、国民の大部分を占める農民層を救済し、併せて農業生産の飛躍的発展と多角化が期待されるであろう。鉱業においては特に外国資本の支配を排除することが共通の課題とされ、1930年代以降メキシコ、ブラジル、ボリビアにおける英米系石油会社の国有化をはじめアルゼンチンにおける多くの国有化が行なわれ、経済的ナショナリズムが強くおこったが、元来資本蓄積に乏しいラ米諸国では最近に至り経済開発不可欠の要件として、再び外国資本の導入による開発がすすめられている。

工業部門においては特に第2次大戦により欧米諸国が軍需生産に追われ、又運送上の困難等を招いている間に工業化が著しくすすめられた。

又、戦後も戦時中蓄積された資本をもって工業化がすすめられその製品は消費材から生産材へと拡がり1948～58年に至る10年間に約70%伸張した。これは又前述したとおり急増する人口的圧力を吸収するためにも必要であり、経済体制の近代化に大いに貢献している。これに伴ない国内及びラテン・アメリカ地域内における消費市場の



機械工場における作業風景

拡大も急がれるわけである。軽工業部門はほぼ自給自足の生産体制が整っており、例えば綿製品は戦前は消費量の2/3を輸入に頼っていたが、現在では10%以下に止まり、メキシコとブラジルでは既に輸出する段階に達している。

重工業部門も戦後の躍進はめざましく、1960年には最も基礎的な鉄鋼部門において、その消費の½以上にあたる500万トンの鋼塊を生産しており、最大の生産国ブラジルでは同年に230万トンを生産している。ブラジルには国有ヴォルタ・レドンダ製鉄所のほかコジッパ、日伯合弁のウジミナス等があり、後者もすでに1963年から生産を開始している

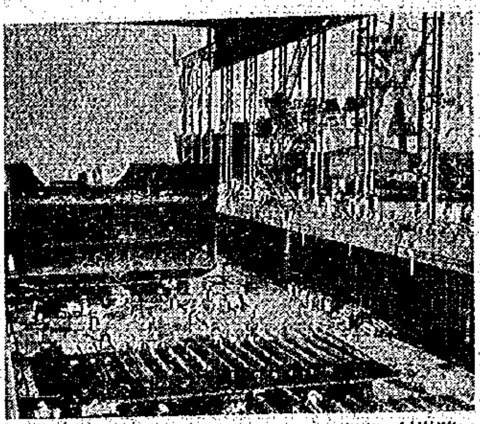
石油精製も次第に拡張されており、ベネズエラは世界第二位の原油生産国であり、ブラジル、アルゼンチンでは石油製品の国産化を最高国策の一つとして精製能力の拡大に努力している。石炭の産出が乏しいこの地域で電力は過去10年間に倍増したが、また全発電能力の7％しか開発されておらず、各国とも電力不足に悩んでおり工業化の推進とともにその開発が急がれている。

自動車工業はブラジル、アルゼンチン、メキシコが盛んで、中でもブラジルは最も進み、世界の大自動車工業が進出しており、わが国からはトヨタ自動車が進出している。セメントの生産も、1948年から1958年の間に倍増し、その他ゴム工業、デイーゼル機関、電気機器、製紙工業等もそれぞれ年を追って盛んになりつつある。

第２節　外国の投融資と援助

ラテン・アメリカに対する外国資本の進出は、19世紀半ば以降活発化し先ずイギリス資本がアルゼンチンの鉄道建設に乗出した。南北戦争後アメリカは隣接するカリブ海地域の独占をめざして1850年代からパナマ、コロンビア、コスタリカへの鉄道、運河の建設に進出し、更に1880年代に至ってメキシコの鉄道建設と鉱山開発に参画して圧倒的支配力を強め、さらに対キューバ投資によって砂糖生産を支配し、西インド諸島のバナナ栽培は尨大なアメリカ資本による

ユナイテッド・フルーツ会社によって支配されている。



ビルディングドック内でのブロック建造，対岸壁に繋留しているのは第一船ボオルタレドンダ号

1918年代におけるベェネズエラの石油開発に対する英・米資本の投下に引続いて約3億7000万ドルを費したパナマ運河の建設（1920年開通）がすすめられ、ここに20世紀当初においてアメリカはカリブ海沿岸を経済的に独占支配するに至った。1920年代以降反米感情は高まり、ラテン・アメリカ側の抵抗が激しくなり、ルーズベルト大統領の善隣外交の展開によってアメリカの干渉は後退したが、アメリカに対してラテン・アメリカ諸国が経済的従属関係にあることは根本的に変りはない。1930年以降経済的ナショナリズムによる外国資本の排除がおこったが、第2次大戦後はとくに各国とも眠れる未開発資源の開発と工業化に積極的で、大部分のラテン・アメリカ諸国はそれぞれ総合的開発計画をすすめている。しかし元来自己資本に乏しく開発資金の調達は国家財政を著しく圧迫し、財政赤字とインフレの一つの原因をなしており、そこで再び外資導入に積極策をとっている。近年アメリカは反共体制を固めるとともにこの地域の政治的軍事的反革命体制の強化を背景として活発な投資活動をつづけている。イギリス資本は著しく後退し、その他のドイツ、フランス資本も少ない。これらアメリカの投資は主としてベェネズエラの石油、ブラジル、メキシコの製造工業等に向けられその全投資の70%以上が民間投資であった。これに対しラテン・アメリカ諸国が望むのは利潤追求を第一義とする民間資本よりも、公共投資であったので、再び反米感情は次第に高まった。

1961年ケネディ大統領は「進歩のための同盟」を提唱し今後10年間にわたって、アメリカはラ米諸国に対し主として公共資金からなる200億ドルの援助を

与えることを約束し、相手国の経済開発計画にそって農地、税制改革を中心とする社会経済改革を促し、基幹産業の育成、住宅、学校、病院の建設、上下水道設備等、社会福祉設備の充実に力を入れることとなっている。

この計画は、いわゆる「プンタ・デル・エステ憲章」として画期的なものであるが、援助をうける国の開発計画樹立がおくれているため未だその緒についたばかりで、その実効は今後に期待されている。

わが国のラテン・アメリカ諸国に対する民間投資は歴史が浅く1958年代より始まり逐年増加して現在50数社の企業が進出し、主として紡績、造船、機械、水産部門に活躍している。その40%がブラジルである。わが国としては今後さらに人的、知的資源を活用し技術援助に積極的に乗出すべきであろう。

第3節 貿　　　　　　易

限られた一次製品の欧米市場への輸出と、その見返えりの工業製品の輸入という植民地貿易形態であることは前に述べたが、ラテン・アメリカ諸国の貿易総額は輸出入ともおよそ80億ドル程度で、食料、原材料については世界最大の供給地の一つとして重要な地位を占めている。特に、バナナは世界総輸出額の80%、コーヒーは70%、砂糖58%、亜麻仁油55%と世界総輸出の過半を占め、原油33%となっている。貿易相手国は輸出入とも米国が圧倒的に多く、最近における対米貿易は、輸出入とも総額の約半分を占めており、対米依存度は極めて高い。戦前、イギリスはアルゼンチンを始めチリ、ウルグァイ、パラグァイ等において最大の貿易国であったが、第2次大戦後は、それに代ってアメリカが進出している。ヨーロッパ諸国も戦後復興するに従い、再びラテン・アメリカ貿易に積極的に乗り出しているが、特にイタリア、西ドイツが注目される。最近ラ米諸国において国際収支の悪化によって輸出先の開拓に努め、また開発用資材を輸入する必要にも迫られ、共産圏との貿易を推進しようとする傾向が

生まれているが、現在はキューバのほかはアルゼンチン、ブラジル、ウルグァイの4カ国だけでその実績も少なく、総輸出額の1.8%前後に過ぎない。

このような背景の下に打開策としての共同市場の必要性が認識され、E.C.L.A（国連ラテン・アメリカ経済委員会）の研究と勧告にもとづきラテン・アメリカ地域内と域外貿易との調和をはかり、本格的共同市場の結成に動き出し1960年モンテビデオにてL.A.F.T.A（ラテン・アメリカ自由貿易連合）を結成した。又1958年以来中米においては経済統合がすすめられている。今後なお域内交易を促進するための輸送手段の改善や各国間の開発度合の著しい差違及び各国間の競合関係等を如何に解決するかという多くの問題を残しているが、市場統合への新しい方向に一歩踏み出したことはラテン・アメリカ経済にとって画期的転換といえるであろう。

ラテン・アメリカの世界主要原料市場における地位（1957年）

単位 1000メトリック・トン

商品名	ラ米の輸出	全世界の輸出	%	ラ米における主要輸出国
バナナ	2.679	3.383	79.2	エクアドル，コスタリカ，ブラジル ホンジュラス，コロンビア等
コーヒー	1.571	2.238	70.2	ブラジル，コロンビア，メキシコ， 中米諸国，ベネズエラ，ハイチ等
砂糖	8.645	14.668	58.1	キューバ，ドミニカ，ペルー，ブラジル
亜麻仁油	166	303	55.0	アルゼンチン，ウルグアイ
牛肉	422	951	44.4	アルゼンチン，ウルグアイ
燕麦	410	1,438	28.5	アルゼンチン，メキシコ
豚肉	30	107	28.0	アルゼンチン
サイザル	148	532	27.8	ブラジル，メキシコ，ハイチ
ココア	203	801	25.3	ブラジル，エクアドル，ドミニカ共和国
綿花	518	3.051	17.0	メキシコ，ブラジル，ペルー，ニカラグア等
鳥肉	53	315	16.8	アルゼンチン
とうもろこし	847	7.162	11.8	アルゼンチン，ブラジル
小麦	2.796	24.466	11.4	アルゼンチン，ウルグアイ
タバコ	81	733	11.1	ブラジル，キューバ，ドミニカ共和国等
羊毛	134	1.224	10.9	アルゼンチン，ウルグアイ
原油	722.429	2.167.828	33.3	ベネズエラ

第4節 わが国との貿易

わが国との貿易は年毎に上昇しているが、わが国のラテン・アメリカからの輸入品目は一次産品で、中でも棉花が最も多く、総額の約⅓を占め、その他砂糖、とうもろこし、羊毛、銅鉱石、コーヒー、ココア、などが主なものである。1959年度の統計を見るとこの地域からの輸入は、総輸入額に対して棉花は52%、砂糖は50%コーヒーは61%を占めている。一方わが国からラテン・アメリカへの輸出品は繊維製品、玩具、陶磁器等のわが国の伝統的軽工業製品は僅か20%に過ぎずその反面、船舶、鉄鋼、自動車、鉄道車輛、その他機械等の重工業製品が50%以上を占めている。

わが国の対ラ米貿易がわが対外貿易総額に占める割合は、1960年度において輸出入ともに6.8%であるが、一方わが国の対ラテン・アメリカ輸出が同地域全体の輸入総額に占める割合は僅か2.4%に過ぎない。この数字は米国の50%西独8.7%、英国5.2%、イタリア3.3%、フランス2.6%に比べて劣ってはいるが、今後この地域は輸出市場として大いに伸張されるべきであろう。

国別総輸出入額表

国	種類	通貨単位	1961 輸入	1961 輸出	1962 輸入	1962 輸出
日本	一般	米ドル	5,810	4,236	5,637	4,916
メキシコ	〃	ペソ	14,233	10,401	14,289	11,711
ドミニカ	〃	ペソ	69.5	143.1	123.3	172.3
アルゼンチン	特別	ペソ	120.976	79,640	152,736	136.181
ブラジル	〃	クルゼイロ	299,357	245,151	511,698	307,130
チリ	〃	ペソ・オーロ	2,867	2,467	2,613	2,583
ペルー	〃	ソル	12,549	13,248	14,418	14,425
ウルグアイ	〃	米ドル	207.6	174.7	230.4	153.4

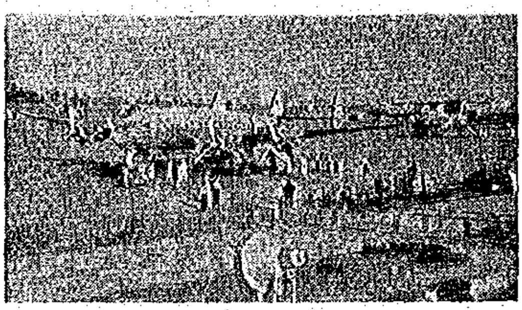
第5節 運輸通信と労働

ラテン・アメリカ諸国の鉄道総延長キロ数は16万3000km、そのうち約80%がアルゼンチン、ブラジル、メキシコ、キューバ、チリの5カ国に集中している。鉄道網が最も発達している地域はウルグァイを含めたアルゼンチンのパンパス地帯である。この大平原は農牧産品の最大の生産地であり、ブラジルにおけるコーヒー生産地サンパウロ州、鉱産物のミナス・ジェライス州、砂糖のキューバ、銅、硝石のチリ中部等に鉄道網が発達しているのをみれば、ラテン・アメリカの鉄道が貨物輸送を主目的としていることがわかるだろう。又中米、カリブ海諸国では米国資本による砂糖や果実の栽培会社によって鉄道が経営されているものが多い。この外ベネズエラ、コロンビア等では大規模な新設計画が既に実施されている。

ラテン・アメリカの鉄道は第2次大戦前までは主として英国系資本の経営によるものであったが、現在では殆んど国営になっている。又道路は延100万キロ以上にのぼるが、ラテン・アメリカ全域をみると道路の発達はおくれており経済開発の障害となっている。最近に至りパン・アメリカン道路（アラスカから南米大陸の南端に至る延長約2万余km)の建設がすすめられ、各国とも国内開発のため道路の建設には非常に力を入れている。

サントス港とサンパウロ市を結ぶハイウェー

開拓の初期においては河川は、重要な交通路であった。殊にラ・プラタ川はアルゼンチン、パラグァイの両国にとっての生命であり又アマゾン上流のペルーの生産物は大部分がアマゾン


サンパウロ市内にある国内航路飛行場

河をベレンまで下り、北上してパナマを経て一部は再びペルーに運ばれるという状態である。アマゾン河は河口ベレンから3,600kmのアンデス山麓のイキトスまで3,000トン級の海洋船が運航されている。従来外国会社経営の船会社が大部分を占めていたが最近ラテン・アメリカ諸国も商船隊を増強している。馬車から一足跳びに飛行機に変ったといわれるメキシコとブラジルでは、航空路は一般に発達しており「空のタクシー」といわれる小型機も盛んに利用されている。

通信機関の発達は一般におくれており、電話の普及率はアルゼンチン、ウルグァイは高いがハイチは1,000人に1台の割合である（日本は1962年1,000人に付67台）。

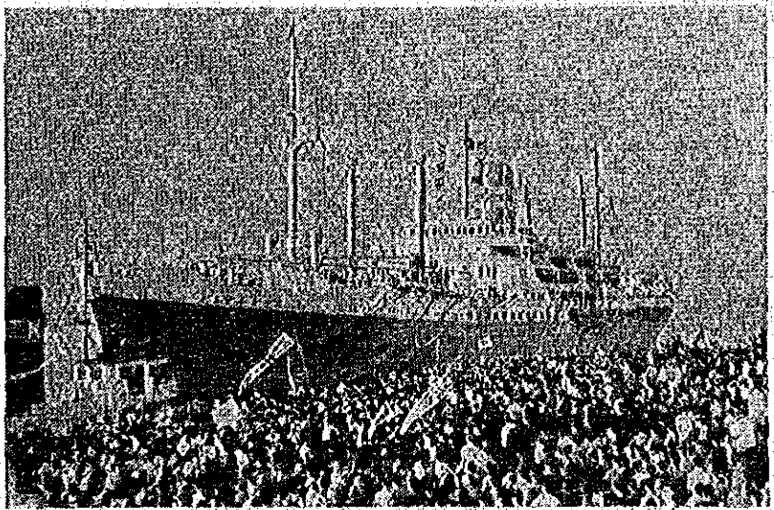
国際電信は殆んど外国系会社に支配されており、最近ブラジルにおいてその接収が問題となっている。

労働力の需要は工業化に伴って漸増しているが、一般に労働生産性は低く特に高級技術者と熟練労働者の不足が目立っている。

ラテン・アメリカ諸国の多くの国では外国人雇用を制限をしているのが一つの特徴で、チリでは各企業につき85%以上がチリ人でなければならないと定めており、又ブラジルにおいても所謂2/3法により外国人の雇用を1/3に制限している。メキシコその他にもあり、経済的ナショナリズムの現われといえるであろう。社会保障制度についてはアルゼンチン、メキシコ、チリ、ブラジル等の諸国は法制化も進んでいるが、国家財源の不足から現実的には前途多難な問題をかかえているといえよう。

第 6 部

日本と密接な関係を持つ国々



希 望 の 出 帆 風 景

第1節 概　　　観

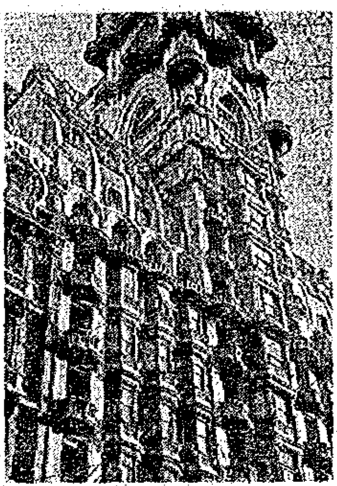
わが国とラテン・アメリカ諸国との国交が始ったのは明治以降であり約70年の歴史がある。わが国が約230年にわたる鎖国の眠りからさめたその翌年、即ち明治元年（1867年）には日本人がハワイ、グァム島への契約労働移民の形態で海外移住を始めた。次いで明治中頃からメキシコ、ペルー移民をきっかけとしてブラジルを始め、ラテン・アメリカ地域への集団移住が盛んとなり大正、昭和の初期にかけて非常に盛んになった。この移住の増大と共にわが国との関係は貿易、文化面でも次第に密接化したが、第2次世界大戦と共に中断され漸く戦後昭和26年（1951年）9月サンフランシスコ平和条約締結以来、次第にラ米諸国との国交が回復した。戦後既に約56,000人の日本人がこの地域へ移住しており、これに加えて企業の進出、貿易の拡大がすすめられ国際協力の実をあげつつある。

第2節 現在までの回顧

日本とラテン・アメリカとの関係は古い。アルゼンチンのコルドバ市の修道院には1577年（足利幕府末期）日本人がポルトガル系ユダヤ人の奴隷として売られた記録が保存されている。又1582年頃漂流していた日本人漁夫が外国船に救われてメキシコへ渡った記録もある。慶長18年（1613年）支倉六右衛門がローマへ往復した途中、立寄った宿舎がメキシコ市に現存している。1629年徳川幕府の鎖国政策により外国との通交は杜絶したが、万延元年（1860年）遣米使節新見豊前守一行は米国からの帰途ブラジルに立寄っている。

1866年日本人の海外渡航禁止が解除され、翌明治元年にはハワイ移民が始まった。明治5年（1872年）ペルーの汽船マリア・ルイス号が修理のため横浜に

入港した際、船中の中国人の労働者の待遇が苛酷でその中の1人が逃亡して日本側に救いを求めたので、時の神奈川県令大江卓は審理の結果、奴隷の売買は人道上反するとして全員230名を釈放させた事件がおこり、これが所謂マリア・ルイズ号事件で翌明治6年には日本とペルーとの間に修交通商仮条約が締結されるに至つた。当時政府は米国始め諸外国との間に不平等条約を結んでおり、これらの改訂に努力していたが、明治21年（1888年）メキシコとの間に平等の基礎の上に修交通商条約を締結したため、やがて、日本の立場を有利に導く道を開らくきっかけとなった。



ラテン系民族の文化と気質をあらわす約100年前の高層建築

更に、日清戦争に際してはチリは日本に軍艦を譲り、又日露戦争に際してアルゼンチンは軍艦2隻を譲り、これが日進、春日と命名され大いに活躍したことは知られている。この外、ラ米諸国が日本に示した好意の歴史は数多いが、特に重要なものは移住関係である。明治初年から始まった日本人の海外渡航はいわゆる出稼ぎ渡航であり、ハワイを始めとして次第に北米カリフォルニアへ進出し約3万人が渡航し、その一部はペルー、メキシコへも渡った。集団的には明治26年グァテマラへ132名、明治27年西インドのグッドループ諸島へ499名が契約コロノとして渡ったが、劣悪な待遇に死亡する者もあり、苦しい生活に耐えかねて帰国する者もあった。明治28年にはメキシコへコーヒー移民が渡ったが、その後、明治32年に至り、始めて南米のペルーへ790名が甘蔗園のコロノとして渡ったが、これも失敗に終り移住者の生活は惨胆たるものであった。ペルー向けの出稼ぎはその後も続いた。次いで1888年黒人奴隷の解放を宣言したブラジルは、コーヒー景気による労働力不足を補うため外国人導入に努力していたが、当時わが国政府は漸く出稼ぎ労働者を喰いものにしがちな悪質移民あっせん業者の取締りに乗出しており、わが国人の海外移住には消極的で

カカオの実

あった。(明治29年移民保護法制定)明治30年代から北米カリフォルニアにおける日本人排斥の気運が高まるにつれて、従来滔々と流出していた北米移住は門戸を閉ざされるに至った。

然し海外進出に燃ゆる日本人有志は、ブラジルに眼を向け明治41年第1回ブラジル移民781名が先陣として渡りコーヒー園コロノとして入植した。ブラジル移住の父ともいわれる上塚周平の苦斗史は頭の下るもので、幾多の教訓を残している。大正時代に至り従来のコロノ移民から自作農経営の移住も始められ、国内では過剰人口対策の一環として海外移住が促進され、次第に盛んになり、昭和6～8年には年間2万人をこえるに至った。ところが昭和9年（1934年）にはブラジルでいわゆる2分制限法が定められ、日本人の入国が最も大きく制限された。これがため昭和11年にはパラグァイ移住が開始されたが、ペルーでは移民制限令がしかれ日本人は殆んど禁止された。やがて第2次世界大戦の勃発と共に日本人の海外移住は全く閉鎖されたのである。

戦後平和条約発効の翌27年ブラジル国アマゾンのジュート栽培移住者54名をもって11年振りに再開され、その後パラグアイ、ボリビア、ドミニカ等への移住もすすめられ、又企業の進出も活発化するに至った。日本人のラテン・アメリカ地域への移住はヨーロッパに比べて約400年おくれており、遙かに新しいが先住日系人はこのラ米全域において既に約60万人といわれ、政治・経済・教育等の各分野においてそれぞれ活躍し、根を下ろして相手国社会に融和同化し信頼をうけている。出稼ぎに始まる日本人移住は、今や100年の歩みを続けているが、幾多の試練と錯誤をくりかえし貴重な体験を得たのであって、現在新しい移住の考え方に立脚して、移住者及びその子々孫々に至るまでの繁栄はもとより、相手国の開発に寄与しょうとする国際協力を基調としてすすめられている。

これらの地域は今後とも可能性の大陸として、その発展が期待されており単

なる出稼ぎのための労働力の移動ではなく、技術と能力を備えた優れた日本人の開発能力を相手国社会に移すことであるとして、それが現代における海外移住の本質といえるのである。ラ米諸国のうち特に移住を中心としてわが国と密接な関係を持つ国々について以下概観してみよう。

第3節　ブ　ラ　ジ　ル

自　然　ブラジルの大部分は南半球にあり、わが国と対照的位置にある。その面積は約851万km²、わが国の約22倍、南米大陸の47.3%を占めている。

国　名　と　国　旗

昔、欧州で盛んに赤色の染料に用いられていた「ブラジルの木」が、この地方の産物だったことから起った名。国旗は緑色の長方形の旗地に黄金色の菱形をとりその中央に白のリボンをかけた藍色の天体をいれている。リボンの文字の「秩序」と「進歩」はブラジル国民の理想を表現し、星は各州を、また旗地の緑は森林やコーヒーを、黄金色は金や鉱物を、藍色は美しい空をあらわしたものといわれている。

アマゾン平地（アマゾナス・パラー両州）ブラジル高地（マット・グロッソ州＝ジャングルの意。及びゴヤス州等を含む）、海岸山系（東岸を東北から西北に走る一連の山脈群）、ラ・プラタ平地（パラナ河、パラグァイ河、ウルグァイ河流域の一帯で低湿地帯）の四部に大別される。アマゾン河はペルー領に源を発し、全長5,570kmで大小の支流を合わせ大西洋に注ぎ北米のミシシッピーに次ぐ大河である。ラ・プラタ河上流のイグアスー大瀑布は観光地として名高い。

北部から南部に至る間に熱帯、亜熱帯、温帯にまたがっている。旧首都リオ・デ・ジャネイロは亜熱帯の南端にあり、南部諸州は温帯地域で、冬には霜や雪が降ることもあり日本の気候によく似ているので、ヨーロッパや日本からの移住者が多く、最も文化の発達した地域である。

住　民　人口は約7,000万人で最近の人口増加率は2%をこえ、近年50年間

に約3倍に増加している。人口密度の高さはサンパウロ州、ミナス州、バイア州、の順である。インディオは数百種族に及ぶといわれ、一般に北部奥地に原始的生活を営んでいる。1583～1850年間、アフリカ黒人が奴隷として輸入された数は約300万といわれ、現在の子孫は主に大西洋岸地帯に多く、白人（ポルトガル人、ドイツ人、スイス人等）は南部諸州に多く、白人とインディオとの混血が全域に住んでいる。因みに、1850年奴隷輸入は禁止され1888年にポルトガル皇女イザベラによって奴隷解放が行なわれた。

ブラジルにおいては人種的差別は殆んどないが、1946年の憲法審議会では戦後の日本人同志の争いもあり、日本移住者禁止を憲法に挿入する議案が上呈され、可否同数となり議長の反対投票で、辛うじて否決されたという事実は十分考えなければならない。人種構成は白人62％褐色人27％黒人15％その他となっている。

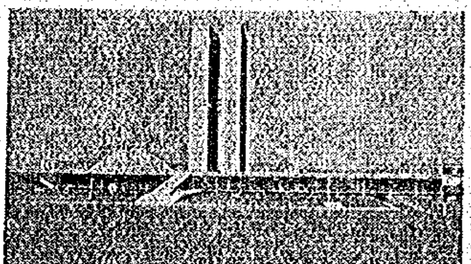
主要都市

ブラジリア市（Brasilia）人口約20万

1960年4月リオ・デ・ジャネイロから移った新首都で大西洋岸から約1,000 km の中央高原に建設された近代都市で、大統領官邸の庭園は日本人園芸家によって設計されたもので、わが国の大使館も近くリオ市から移る予定である。

リオ・デ・ジャネイロ市（Rio de janeiro）人口約330万。

グワナバラ州の首府。サン・パウロ市に次ぐ商工業地帯であり、世界3大美港の一つとして有名であり、わが国の大使館がある。



ブラジリアの心臓部国会議事堂

サン・パウロ市（Saŏ paulo）人口約380万。

ブラジル第1の都会で、世界で最も人口増加率が高い都市である。サンパウロ州は同国最強の経済力を持ち、南米のニューヨークの観がある。市内には、わが国の総領事館

があり、約6万の日系人が居住している。わが国からの進出企業も殆んどこの周辺に集中している。市内には世界に誇るブタンタン毒蛇研究所や1822年9月7日独立を宣言した有名な「イピランガの丘」がある。

サントス市（Santos）人口約30万。

コーヒーの輸出港として世界的に有名であり、又諸外国からの移住者の殆んどがここに上陸する。サンパウロ市の海の玄関といわれ、サンパウロに通ずるサントス街道は景観である。

ポルト・アレグレ市（Porto Alegre）人口約64万。

リオ・グランデ・ド・スール州（南大河州）の首府で、南部ブラジルの政治経済の中心地である。この州は米、羊毛の重要産地で、四季の区別がはっきりしており、気候はヨーロッパ、日本などとよく似ているので、ドイツ、イタリアなどからの移住者が多い。州民はいわゆるガウチョ（牧童）精神を尊び誇りとしている。又同市には倉敷紡が進出して羊毛糸の製造を始めており、わが国の総領事館もある。

レシーフェ市（Recife）人口約80万。

ブラジル第3の都会で、ブラジル北部における政治経済の中心地で、オランダ占領時の首府であり、ブラジルで最古の都会の一つである。人工港で砂糖、サイザル麻、油脂原料等はここから輸出される。わが総領事館があり、日本冷蔵がここを基地として漁業界に活躍している。市内には運河が多く〝ブラジルのヴェニス〟の名がある。

サルヴァドール市（Salvador＝救世主の意）人口約60万。

ブラジル第5の都市で、ブラジルが植民地時代の首府であった。ココアの輸出港として知られ市中には16、17世紀時代の古い建築物が多く昔が偲ばれる。

ベロ・オリゾンテ市（Belo Horizonte＝麗わしき地平線の意）人口約68万。

ブラジル第4の都市で〝一般の鉱物〟を意味するミナス・ジェライス州の首都。農牧、鉱業の中心地であり、近年工業都市として急速な発展を示している主な工業は製鉄、繊維、ダイア研磨等であり、わが国最大の海外投資であるウジミナス製鉄株式会社の本社がある。

ベレン市（Belem）人口約40万。

アマゾン河口から150kmの地点にあり、パラー州の首都。アマゾナス州、パラー州その他アマゾン流域諸州の開発を目的とするアマゾン開発庁本部がある。ゴム、カカオ、ジュート麻、胡椒等の集散地で、わが国の総領事館がある。ベレン市より西南約200kmの地点にはラテン・アメリカ最大の胡椒生産地の大トメアス移住地がある。胡椒（ピメンタ・ド・レイノ）栽培は日本人がシンガポールから持込んだわずか3本が移植に成功したことが起源で、今やその世界的進出が期待されている。第一トメアス移住地は1930年開設され、約400戸の日本人が活躍しているが、更に1960年以来、その南側30kmの地区に第2トメアス移住地（25,800ha）が建設され入植を始めている。

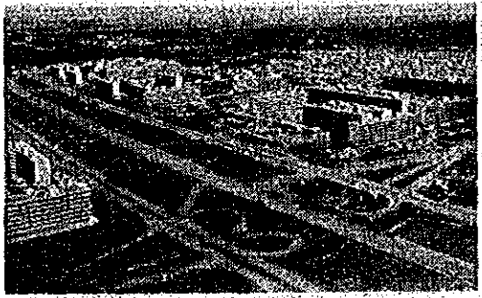
マナウス市（Manaus）人口約18万。

アマゾナス州の首都。アマゾン河から約1,450kmの上流にあり、海洋船が航行することができる。かつて19世紀後半には、ゴム景気によって一時大いに栄えた。この地域一帯にわたるジュート麻の生産もわが国移住者によって開拓されたものである。

現代への歩み　1500年ブラジルが発見された後約30年間は、ポルトガルはわずかにパウ・ブラジル（ブラジルの木）を伐出したに止まり、植民による開拓には熱意を持たなかったことは前述したとおりである。そこでフランス人やオランダ人は防備のうすい沿岸地帯に侵入して、パウ・ブラジル（ブラジルの木）を盗伐したので漸くポルトガルは植民にふみきり、1532年サン・ビセンテ（サントスの隣接地）に最初の植民地を建設し、次いで10カ所余りの植民地を建設したが、この頃から早くも土人との混血が始まった。1549年に至り初代総督が赴任し開発に力を入れることになったが、当時の移住者は犯罪人かユダヤ人が多かった。この頃から北東地方のさとうきび栽培が盛んになり、いわゆる砂糖時代（1530年～1680年代）を迎え砂糖生産は大いに進み、労働力の不足を補うため、アフリカ黒人の輸入が始まった。

1518年スペインの圧政に反逆して、独立したオランダは、積極的に世界貿易への進出に乗り出し、1621年西インド会社を設立し、1630年にはブラジル北東

部の砂糖地帯の占領に成功し、以来20数年間支配するに至った。当時レシーフェにオランダ領ブラジルの首都を作り、隆盛を極めた。ポルトガルは1580年以来60年間にわたるスペインの統治から漸く独立を取り戻し、遂に1654年西インド会社を追放し、ブラジルに対する統治権を回復したが、再来ポルトガルはブラジルに対して強い態度で臨み重商主義的政策をとり、総督の権限を強め搾取を始めた。又当時ポルトガルからの激増した移住者の中、貧しいサンパウロの植民者達は、奥地へ進み土人狩りと金銀を求めていわゆるバンディランテ（奥地探検隊）の活躍が展開された。17世紀末にミナス・ジェライス州で金とダイヤモンドが発見され、バンデイラは勇気づいて更に奥地へ奥地へと向い、広大な地域に分散した。

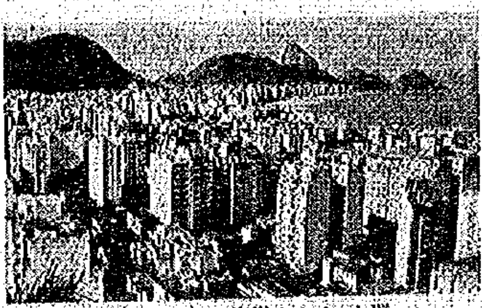

市街建設と高速道路

一方ジェスイット派の神父たちは北部のマラニョン、パラー両地方の前人未踏の奥地に入りこみ、教化につとめ、アマゾン河流域開発の拠点を作った。

ミナス・ジェライス州の金発見のあとゴヤス・バイーア州にも、次々と発見されここに黄金時代（1700～1770年代）が約70年間続いたが、18世紀末に至りフランス及びイギリスの啓蒙思想はブラジルへも大きく影響し、一部の植民地人の間に共和制への芽生えが起った。

かくして1808年、ナポレオンの圧迫から逃れてブラジルへポルトガル王室が移転したことによりブラジルの近代化は始まったといえる。

しかし、奴隷制度と1810年イギリスと結んだ通商友好同盟によって圧しつぶされ、1822年独立後も近代化は遅々として進まなかった。世界的風潮と直接にはイギリスの圧力により1850年奴隷貿易を禁止するに至ったが、莫大な奴隷輸入費が浮き、かえって産業近代化はすすめられ、やがてコーヒー時代（1830～1940年代）が到来したのである。



コパカバーナ海岸のアパート群

ブラジルのコーヒー栽培は18世紀に始まったが、金鉱の衰徴からコーヒーに着目され19世紀に入りコーヒーはブラジル経済の担い手となった。又、アマゾン地域においてはゴム景気がおこり、1911年にはコーヒーとならんで総輸出の40%を占めるに至ったが、その全盛期は半世紀しか続かなかった。黒人奴隷禁止後、労働力を補うため外国移民の大量導入がすすめられ、イタリア、ドイツ人を始めヨーロッパから1934年の移民2分制限までに約450万人が移住し人口は急増し、日本人も1908年以来約15万人が主としてコーヒー園労働者として移住した。

第一次大戦後コーヒーブームがおこり、ブラジルは史上最大の好景気を迎えたが、やがて生産過剰となり又ゴム不況も重なり、恐慌を招いて多くの失業者が続出した。又19世紀末に北東部を襲った旱ばつは史上最大の惨状をもたらし大きな社会問題を惹起するに至った。

政治面ではコーヒーが全盛期に入った1850年頃から国内の混乱もしずまり、ドン・ペードロ2世の帝政でブラジルは画期的興隆期に入った。

1888年ブラジル全土約72万人の奴隷が解放されるや、不満を持つ地主階級は軍部と結んでクーデターをおこし、ドン・ペドロ2世はヨーロッパへ去り、翌1890年憲法制定議会が開らかれ、帝政から共和制へと大きく変った。その後、1930年革命がおこり、バルガス大統領は長期にわたって独裁政治をおこない、新国家体制をしき、外資を導入し、石油の開発を始め、工業化を推進した。

更に第二次大戦はブラジルに繁栄をもたらし、国際収支を好転させ、1930年の革命後、バルガス独裁政権は強力に経済開発をすすめ、工業化がめざましく発展した。しかし、コーヒー棉花等の一次産品に支えられていたブラジル経済は、早くも1947年頃から破たんを招き慢性化したインフレは昂進する一方であった。バルガス失脚後政情は必らずしも安定せず、労働者階級を始め共産主義

者の革新勢力は次第に増大してきた。

政府は経済開発5カ年計画をすすめると共に奥地開発の一環として年来の課題であった新首都ブラジリアの建設（サンパウロの北方約1200km、ゴヤス州の一角）を始めたが、開発計画の急ピッチ推進とブラジリアの建設が慢性的インフレに拍車をかけることになった事実は否定できない。又ノルデステといわれるブラジルの北東地方（日本の約7倍の広大な地域でブラジル総人口の1/3を擁する）は、数年毎に襲う旱ばつによって莫大な被害を蒙り、その難民救済問題は大きな社会問題として残されており、政府もノルデステの旱ばつ対策と経済開発に力を入れ始めている。又工業化が進められる一方多年の懸案であった農地改革が大きく取上げられようとしている。国際関係においては対ソ通商の窓を開き従来の対米依存度を低めようとする動きもあり、自主外交の方向へと進みつつあるが、経済開発とインフレ克服への努力と共に、今やブラジルは社会改革を含めて発展への希望と現実の混乱の中にあるといえるであろう。

産業と文化

19世紀までのブラジル産業史を大きく区切ると、北東地方における砂糖時代（16〜17世紀）、ミナス・ジェライス州の黄金時代（18世紀）と、リオ・デ・ジャネイロ州、サンパウロ州のコーヒー時代（19世紀）であり、それぞれ繁栄した時代と地方によってブラジルの経済と社会文化の中心が移ってきた。

ブラジルの産業の基調は農牧業で、全人口の1/2が従事しており、輸出品の第1位はコーヒー（総額58%）で、棉花、ココア、砂糖等である。又牛豚羊等の飼養が盛んで世界有数の牧畜国でもある。鉱物資源は石炭等一部を除いて埋蔵量は極めて大きく、近年鉄鉱石、マンガン鉱、石油（埋蔵量6億バレルといわれている）の開発も逐次すすめられている。

コーヒー園とコーヒー乾燥場

ブラジルの工業はラ米地域中最も古く1850年代に始まり、食品雑貨等の軽工業が発達してきたが、第2次世界大戦を通じ工業化は強力に推しすすめられ、特に製鉄、自動車、繊維、パルプ工業が盛んである。

ブラジルの文化の特徴はポルトガル文化が主体をなし原住インディオとアフリカ黒人文化に加えて、フランス文化の影響をうけており、未開の奥地には原始的インディオの風習がそのまま残っている。

宗教はローマカトリックが94%を占め、言語は南米唯一のポルトガル語系である。教育は都市では普及しているが、地方では非常に遅れており、文盲率は50%以上といわれ政府も文盲退治に力を入れている。

1928年以来法令をもって14才以下の児童の外国語教育を禁止している。ブラジルの国民的スポーツはフットボールで非常に盛んである。

日本との関係　第2次世界大戦のため国交は一時杜絶えたが、1952年再び国交が開かれて以来急速に両国の親善関係は増大し移住、通商のほか日本の企業進出も活発化している。

ブラジルへの日本人移住は1908年（明治41年）笠戸丸による781名を先陣として始まった。爾来50年余第1次第2次世界大戦を経過しこの間「外国移民入国2分制限」（1934年）により、特に日本移住者は多大の制限をうけたが、第2次大戦までに約19万人、戦後約4万人が移住し、その子孫を合せて現在約50万の日系人が活躍しているが、その苦斗の歴史こそまさに移住史を物語るものである。日本人のブラジル移住は1933年（昭和8年）のピーク時には年間約2万人を越えたこともあったが、昭和10年を境として急激に減り大戦と共に杜絶した。

戦後1952年（昭和27年）移住再開第一陣はアマゾンのジュート栽培移住者54名を以って11年振りに始まった。ラ米地域への移住者総数の約80%がブラジルであることはいろいろ理由もあろうが、日本人先輩移住者の勤勉が高く評価され好意をもって迎えられていることによるものと思われる。最近ブラジルの工業化が進むにつれて農業以外の工業技術部門でも歓迎され、1961年以来工業技術者の移住が始められている。1963年（昭和38年）10月待望の日伯移植民協定が

発効し、国際協力の線に沿って、今後の移住が進められることとなった。又日本企業の進出も盛んで東洋紡、石川島造船、鐘紡、その他20数社がリオ及びサンパウロ市周辺で操業している。

在伯日系人の約80%は農業に従事しているが、主としてサンパウロ郊外における蔬菜、果実、米作りを初め、パラナ州におけるコーヒーの生産等に従事している。又アマゾン流域におけるジュート（麻）とピメンタ（西洋胡椒）の栽培は日本人の手によるものである。

日系農業者の中には数万町歩の大農園主として成功した人々も数多くあり、日系2世の中には国会議員を初め政界、教育界、医学界の各方面にも多数活躍している。特筆さるべきは亜熱帯における模範農場経営としてブラジル農業の発展に寄与した東山農場の故山本喜誉司博士が、コーヒー害虫の撲滅方法を発見した功績によりブラジル最高勲章を授与されたことである。又、南米第一の規模を持つ「コチア産業組合」（組合員数約10,000名）も日本人が創設したものでサンパウロ州を中心として広域にわたって農産物の生産販売等の活動に従事しており、又日本から農業青年の受入れもあっせんしている。

海外移住事業団では、リオ、サンパウロ、ベレン、レシーフェ、ポルトアレグレに各支部を設け移住者の受入れ業務を担当しているが、今後とも移住の大宗をなすブラジルとの親善関係が増大し、日本人の持つ技術と能力がブラジルの経済開発に寄与し併せて移住者の繁栄をもたらすことを期待し推進をはかっている。

日伯間には1953年5月戦争によって杜絶えていた文化協定が復活し、リオ及びサンパウロには日伯文化協会が設けられているが、1961年1月日伯間の文化協定が改訂調印され、留学生の交換や大学教授の招致を初め芸術家の交流等も行なわれている。

第4節　アルゼンチン

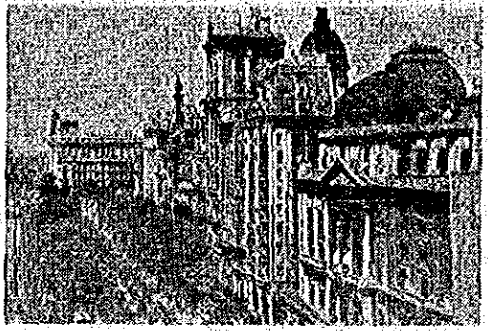
> **国　名　と　国　旗**
>
>
>
> アルゼンチンという名は同国を流れるラ・プラタ河という大きな河の名と同じ意味だということである。国旗は横に3等分した節があり、上から淡青色、白色、淡青色となっており、白色の部分に黄色で「5月の太陽」が入っている。青色と白青は1806年のイギリス軍侵入を撃退した時にアルゼンチン人の着ていた服の色に由来するといわれ、また太陽は1810年の5月10日のスペイン統治に反対して、起ち上った革命のシンボルといわれている。

自　然　アルゼンチンは南米大陸の最南端に位し、南米ではブラジルに次ぐ大国で、面積は2,790万km²わが国の約8倍である。1515年スペインの探険隊によって発見され、以来スペインの支配下におかれたが、1816年7月独立して、今日のアルゼンチンの基礎を定めた。中央部のパンパス平原帯は主産業の中心地で北から南へゆるやかに流れるラ・プラタの大河はこの大平原を灌漑しつつ大西洋に注いでいる。北部と東部はコルドバ山脈を中心として畑作の盛んなチャコ平原が拡がり、森林と沼沢が多い。南部[illegible]して湖水が多く、牧羊の最適地として有名である。南部チリ国境にあるナウエル・ウアピ湖は国立公園として有名である。

アルゼンチンは概して温帯に属しているが、北部と東北部は亜熱帯性で暑く温度も割に高い。この地方は四季の別が殆んどなく、雨期（10～3月）と乾期（4～9月）に分かれているに過ぎない。南に下るに従って四季の区別がはっきりしており、日本とは反対に春は9～11月、夏は12～2月である。国土の1/3を占めるアンデス地帯は高度によって気候が変化し雨量は一般に少なく、特に北部の高原地帯には殆んど降雨をみない。

首都ブエノス・アイレス（Buenos Aires＝良い空気の意）の夏期の平均温度は25°C冬期は12°Cである。

住　民　人口は約2,095万で人口増加率は1.9%である。住民の殆んどがヨー


ブェノス・アイレス市のオフイス街

ロッパ系白人で南米インディオの血をひく土着人の割合は3％弱にすぎない。19世紀後半におけるヨーロッパ人の大量移住により人口は激増し、その中スペイン人、イタリア人が大部分を占めている。

主要都市

ブェノス・アイレス市（首都）人口約360万。

南米屈指の大都会で、ラ・プラタ河口にあり、その美しい市街は「南米のパリ」と称せられている。政治、経済、文化の中心地で、市内には植民地時代の名所旧跡が多い。5月広場（Plaza de Mayo）にある政庁とカトリック寺院、議事堂広場、コロン劇場、パレルモ公園等は、観光客が必ず訪れる名所となっている。わが国の大使館を始め日本人会館もあり、又日本毛織、大洋漁業、日本水産の諸会社が進出している。

ロサリオ市（Rosario）人口約60万。

アルゼンチン第2の都会でブェノス・アイレス市の北方約300kmのパラナ河西南にある天然の商業港であり、中央および北部諸州の穀物、農産物の輸出および国内輸送の中継地となっており、日本船もトウモロコシや小麦の積荷に寄港している。

コルドバ市（Coldoba）人口約52万。

南米最古の大学があり、保養地として名高い、最近航空機、自動車等の製造工場の発達がめざましい。

ラ・プラタ市（La Plata＝銀の意味）人口約31万。

ブェノス・アイレス州の首府。

教育の中心地であり、大学附属の自然科学博物館は世界的に有名である。

ツクマン市（Tucumán）人口約26万。

ツクマン州の首府で、アルゼンチン独立の叫びをあげた歴史的都市で教育の

パンパ地帯に綿羊を追うガウチョ

中心地であり、又製糖業が盛んである。最近ツクマン大学は日本から学者を招聘しており、親日的な都市である。

マル・デル・プラタ市（Mal del Plata＝銀の海の意味）人口約16万。

首都の西南方約300kmの海岸にあり、「大西洋の真珠」又は「南米のモンテ・カルロ」などとも呼ばれる海浜の保養地である。常時の人口は16万に過ぎないが、夏になると避暑客で賑い70万人をこすといわれる。

現代への歩み　1515年スペイン探険隊に発見されて以来独立(1816年)に至る300年間は征服と開拓の時代であったが前述したとおり殆んど原住インディオとの混血もなく、又彼らが求めた金銀財宝も発見されず、政治的には当初ペルー副王の支配下におかれ16世紀末に若干の植民地を建設したに止まり、豊かな大平原に牧畜農耕を行なっていた。その後1776年に至り、カルロス3世がリオ・デ・ラ・プラタ植民地を独立せしめ副王制を布くに至り、ブエノス・アイレスは急速に発展し農牧業の中心地として栄えた。1806年イギリス海軍が再度にわたりブエノス侵略を企てたが、植民地人が主力となって男も女も団結して勇敢に戦い、これを自から撃退したことにより士気は大いにあがり、やがて自由と独立の気運は高まり1810年の革命において副王は退位しここに独立を宣言するに至った。その後インディオの討伐と革命政争が続いたが1853年連邦制憲法が制定され、「統治することは植民すること」であるとしてヨーロッパ人の大量導入を図る一方鉄道敷設がなされ、教育の普及に力を入れ、政情安定と共に大いに国運は進展した。

第一次大戦時には中立を維持し、第二次大戦においても1945年宣戦したに止まり、その後、ペロン政権下においては「政治的主権と経済的独立と社会正義の確立」をモットーとして、工業化と主要産業の国有化をはかり社会保障の充

実等強力に改革を推進したが、軍部地主や教会勢力等保守陣営の反撃をうけ、1955年軍事革命により失脚した。ペロンを支持するペロニスタ党は今なお根強く残っており、アルゼンチン政情の不安の一因をなしていることを見逃してならない。今やアルゼンチンはペロン政権独裁のあとをうけて政治的経済的にもその苦斗の中で新らしい道を見出しつつあるといえるであろう。

社会と文化　白人国といわれるだけに、国民の大部分はヨーロッパ系移住者の子孫であり、社会構造上の人種的理由による職業的差別は殆んど見られない。ただ、大都市における商業の実権は主としてユダヤ系ヨーロッパ移住者の手に握られているのが目立っている。

インディオやアフリカ黒人の要素が入っていないので、都市生活はヨーロッパの生活様式をそのまま移した感じがある。地方ではその地方都市の開拓初期の出身国別によってスペイン、イタリア、イギリス風というような特色が見られ、北部地方においてはインディオ固有の風俗習慣が見られる。

国教はカトリック教で全国民の約85%を占め、国語はスペイン語で南米で最も教育が普及している。

芸術も盛んで19世紀初めにおける田園生活を背景としたガウチョ（牧童）文学や、庶民の間に生れたタンゴ・ミロンガの踊りは広く知られている。

産　業　農牧畜産業が国家経済の主軸をなし総輸出額の90%を占めている。小麦はアルゼンチン第一の農産物で良質で知られ、米国、カナダに次ぐ世界第3の輸出国で、次いでとうもろこし、亜麻仁油棉花が主なものであるが、耕作面積はわづか全土の11%に過ぎず今後の開発が期待されている。

地勢と気候の多様性により他のラ米諸国に比べて著しいモノカルチュア（単一生産）から救われラ米地域の中では割に対米依存度が少ない。第二次大戦後戦時中蓄積した外貨によって工業化が急速にすすめられ、特に10年間にわたるペロン政権下において経済的独立を目指して主要産業化の国有化等を始め急激な改革がなされたが、やがて行詰りペロン政権は崩壊した。

従来輸入に依存していた石油資源の国内開発がすすめられ、外貨事情も好転しているが、今後工業化の促進と農業技術開発の調和ある発展と外資導入こそ

大きな課題であろう。

日本との関係　伝統的に日本とは友好的で、日露戦争のときわが国に軍艦を譲った事がある。第2次大戦の時にも終戦近くなって対日断交をしたほどである。1960年に独立150年記念祝典が催されたときはわが国からも特派大使を派遣した。

アルゼンチンの人口に占める外国人の比率は、1914年の42.7%を最高として漸次低下し、1945年には17.8%に減少した。この中最も多いのはイタリア人で、スペイン人がこれに次ぎ最近ではヨーロッパにおける戦後の経済復興に伴ないヨーロッパからの移住者は著しく減り日本人の受入れが期待されている。

アルゼンチン政府の移住政策の基本は、経済発展に寄与しない移住を抑制すると共に、人口の首都集中を出来る限り排除する（同国人口の1/3は首都及びその周辺に集中している）こととし特別の技術を持たない無統制な漠然とした目的の移住者は歓迎しないし、農業移住者でも具体的な植民計画を持たない者には許可しない方針をとっている。しかしこれは外国人移住の総てを抑制しようとするものではなく、アルゼンチンの経済に大いに寄与し得ると思われる移住者に対しては喜んで門戸を開くという態度である。

現在の在留日系人は約15,000人と推定され、およそ農業40%、クリーニング業35%、商工業その他が25%といわれている。アルゼンチン政府は従来一部の呼寄せによる日本人の移住を認めていたが1957年向う5カ年間に400家族の受入れを許可した。日系企業は前述のとおり日本毛織、太洋漁業及び日本水産の3社が進出し活躍している。そもそも日本人が始めてアルゼンチンに渡ったのは1886年（明治19年）に記録があるが、その後、笠戸丸によるブラジル第1回移民の一部が転住してきたことにより明治末期には約300人をこえ、昭和16年頃までには約8,000人にふえている。

対日貿易は1960年に往復約8,000万ドルで日本の輸入超過となっており、日本への主な輸出品は、とうもろこし、原羊毛で、輸入品は鉄鋼機械類である。

現在ミシォネス州には約500人の日本人が活躍しているが、この地方への日本人の入植は1921年（大正10年）に始まり、草分けの苦労を重ね営々として地

歩を築いてきたが、現在では日本人入植者もふえマテ茶、柑橘等の栽培によって安定した生活を送っており、大農園主として成功している人も多い。

アンデス山脈の東側メンドサ州には約300人の邦人がおり、一般には果樹園ブドウ酒醸造工場を経営しており、30年～40年の苦斗の上今や邦人の中には広大な農場を経営して、豊かな生活を送っている者も多い。この地方は典型的な畑地灌漑農業で果樹の栽培に適し、日本人の優れた農業技術による開拓が期待されている。ブェノス・アイレス近郊には多くの花卉蔬菜栽培者が居り、花作りは日本人の独占で、芸術を愛するアルゼンチン人に愛好されている。中でも賀集農場はアルゼンチン第1級の草花を作っている。二世の中からは、高級官吏、学者も出てアルゼンチン社会で活躍している。

海外移住事業団は、北東部のミシオネス州にガルアッペ移住地(3,110ha)、アンデス山脈東側メンドサ州にアンデス移住地（1,312 ha）を造成分譲するとともに、ブェノス近郊の花卉蔬菜栽培青年の呼寄移住を推進している。

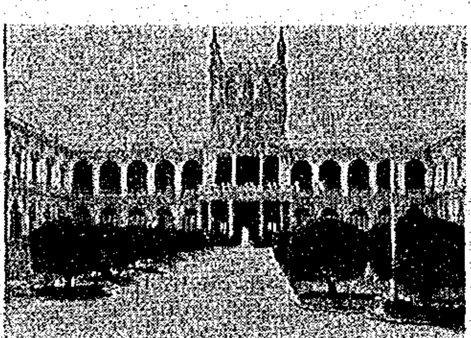
第5節　パ　ラ　グ　ァ　イ

自　然　南米大陸のほぼ中央に位し海のない内陸国で、1535年スペインの植民地となり1811年独立し1844年共和国となった。海洋への通路は従来アルト・パラナ、パラグァイ両河を経てラ・プラタ河へ下り、アルゼンチンのブェノス・アイレスに出るより他はなかったが、最近ブラジルのパラナグア港に通ずる国際道路が建設され近く完成の予定である。面

国名と国旗

国名の起りは、土人語で「鳥毛製のかんむり」の意味だというのと、土人が「シュロの花咲く花輪の水」という意味で、パラグァイ川を「パラグァイ・イー」とよんでいたことによるという説がある。国旗は横3段に等分して、上から赤、白、青の3色旗。中段白色の中央に国章が入っている。赤色は戦争を、白色は平和を青色は秩序をあらわしている。国章の部分は表裏異っており、表が正式の国章、裏は国庫を表現している。

積は約40万6千km²でわが国よりも少し広い。
国の中央部を縦貫するパラグァイ河によって東南部と西北部に分かれ、東南部は複雑で変化に富み、原始林の多い丘陵地と平原が交錯してゆるい波状形を成している。南西部には平原が多い。西北部はチャコ地方と呼ばれる大草原である。北西部は一般に高原で、平均高度は300m内外、東北部は低湿地が多く沼沢に富んだ大草原とジャングルである。
気候は割合いにはっきりした四季があり、春は9、10の2カ月、夏は11～3月迄の5カ月、秋は4、5の2カ月、冬は6～8月の3カ月間である。年間を通じて平均気温は24.5°C、冬期には降霜を見ることがある。
住 民 この国は16世紀の半ばスペイン人が現在の首府アスンシォン市に植民地を建設して開拓を進めた国である。開拓者たちは独身者が多く彼らはすすんでこの地方のインディオであるグワラニー族と結婚し、混血していったので現在はこの混血がある程度定型化し、それがパラグァイ人の96.5%を占めている。もちろん、この他に新しく移住して来たヨーロッパ人（特にドイツ人、ポーランド人、白系ロシヤ人）やその子孫が約2%あり、さらにインディオの未開種族も数万人原始的生活を送っているが、黒人は全くない。人口は約184万人で人種的差別はない。
主要都市 アスンシオン市（Asunción）人口約30万。
1541年、スペイン人によって建設され、パラグァイ河東岸にあり海抜100m パラグァイの首府であり、国立アスンシォン大学とカトリックの総合大学がある。又、わが国の大使館がある。
エンカルナシオン市（Encarnación）人口約2万6千。
従来木材、マテ茶、煙草、綿花、皮革等の集散地であり輸出港であったが、昭和28年以来当市より約40～60kmの地区にフラム、チャベス、アルト・パラナ等の海外移住事業団直轄の移住地があり、日本移住者受入れの前進基地的役割を果たしており，わが国の領事館もおかれている。
現代への歩み 1524年ポルトガル人探険隊が金銀を求めてブラジルからアスンシォンに達したのが最初であるが、土人に襲撃されてほと


大統府政庁

んど全滅した。その後西方に白人統治下の金銀の国があるという話がヨーロッパ人探険隊の耳に伝わり、ラプラタ地方の探険熱が高まり、相次いで探険隊が送られた。

1536年スペインの初代総督メンドーサが現在のブエノス・アイレスを拠点としてラプラタ地方の征服をすすめ、その後1541年その部下イララ等はアスンションを市と定め、スペイン植民地として支配するに至った。当時のパラグァイ州は現在のパラグァイのほかブラジル及びアルゼンチンの一部を含む広域であった。1810年アルゼンチンの独立に刺激されて同じラ・プラタ地方のパラグァイ州民の中にも独立の気運がおこり、翌1811年独立を宣言した。独立後、間もなく1814年以来27年間フランシアの独裁がつづき、彼は鎖国を行ない専ら国内開発をすすめた。その後ロペス親子の独裁がつづき、1845年奴隷制を廃止し、鎖国を破って通商は次第に活発になった。当時膨張をつづけるブラジルはウルグァイに干渉し、アルゼンチンはウルグァイ政府の反対党を支持していたため、ウルグァイ政府はパラグァイへ救援を求めたので、かねてナポレオンに憧れ仲裁者の立場を誇っていたパラグァイの独裁者ロペスは、ブラジルを強く非難していたが遂に、1864年ブラジル客船の攻撃をもって戦争の口火が切られた。その後ウルグァイ政府は反対党に倒され又当初中立を保っていたアルゼンチンも参戦し、ここにパラグァイはブラジル、ウルグァイ、アルゼンチン三国を相手として５年間にわたり激しい戦いをくりかえした。

これがパラグァイ戦争で、ロペスの死によって敗戦をもって終りを告げ、領土の一部はブラジル、アルゼンチンに割譲され、多くの男子を失い国土は荒廃した。ここにおいて1870年ブラジルの軍政下に反ロペスの政治体制が樹立されその後84年間に37人の大統領が替わり政情は安定しなかった。この間、代々の

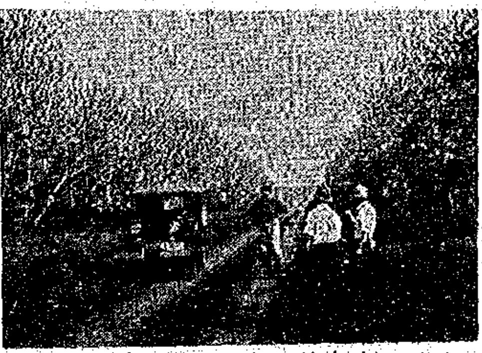
政府は人口対策の一つとして外国移民を歓迎した。移住者の主なものはイタリア・スペインであったが、19世紀初めからブラジルから移動してパラナ河畔に入植したドイツ人と、チャコ地方に入植したメノ派教徒は特異の地位を占め、勤勉な開拓者として繁栄し現在に至っている。又1870年以降しばしばボリヴィアとの間に国境紛争が繰り返えされ、特に1932年のチャコ戦争は3カ年に及び、米国ほか5カ国の調停によって停戦し解決をみたが、これによって国力は再び疲弊した。その後、再び政争がつづいたが1954年以降ストロエスネル大統領の率いる共和国民党（通称赤党）が絶対多数を誇り、その反対党である自由党（通称青党）を圧しており既に三期大統領をつとめ現在に至っており、政局は大体安定している。

然しパラグァイは人口少なく経済開発はおくれており、いろんな意味でまだ若い国であると云えよう。

社会と文化　パラグァイにはブラジルやアルゼンチンに見られないほど完全に近いヨーロッパ人（主にスペイン人）とインディオの混血が行なわれ、パラグァイ社会の指導層を成すものは白人ではなく、この混血人である点に特徴がある。

土着のインディオであるグァラニー族にはメキシコのマヤ・アスティック、あるいはアンデス地方のインカのような高度な文化は見られなかったが、尚武の気性に富んだ種族であった。当初この土地に根を下ろしたスペイン人の数は比較的少なく、19世紀の後半まで殆んどヨーロッパからの移住者が来なかったので、スペイン人のもたらしたイベリア文化は伝播発展することなく、数において圧倒的な土着グァラニー

頭にビンを乗せて踊る民族舞踊



日本人移住地の油桐畑

族の素朴で力強い文化の影響を受け、いわゆる文化的混淆を遂げ独得の文化を形成した。これをグワラニー・エスパニョールと呼んでいるが、そのグワラニー・エスパニョール精神が、今日パラグァイ民族主義思想の基盤となっている。

従ってパラグァイ国民はラテン文化の伝統を受けついでいるとともに他方土着のグワラニーの精神を抱いていることに非常な誇りを持っている。国民の大部分がこの混淆文化を背景としたパラグァイ民族思想で結ばれており、人種の如何を問わず同じパラグァイ人として力強い団結を持っている。しかし、1811年に独立した後、相次ぐ革命と近隣諸国との長期に亘るパラグァイ戦争（1865~1870年）及びチャコ戦争（1932~35年）によって勇敢な多くの男子を失ない、国力を消耗したことが今日もなお影響している。産業は農牧林業に止まっているが、最近技術と資本を導入して加工工業化がすすめられている。牧畜は牛が最も多く、約550万頭（1人につき3.5頭の割合）で牧畜産品は総輸出の約1/3を占めている。

宗教はカトリック教が圧倒的に多く、特に植民地時代におけるジェスイット派の教化は最も深く滲透しており、1776年ジェスイット派が新大陸から追放された後も、混血民族の生活にまで強く残っており、往時を偲ぶ寺院の遺跡もある。

国語はスペイン語であるがグワラニー語も一般に広く使用されている。従来文盲率は高かったが政府は重要政策の一つとして教育の普及に力を入れている。

日本との関係　戦前日本はアルゼンチン公使がパラグァイ公使を兼任していたが、戦後1956年日本は、公使館を設置し更に、1961年双方ともこれを大使館に昇格した。

日本とパラグァイとの関係で最も重要なものは移住関係である。戦前からパラグァイは日本人移住者の受入れに開放的であり、1936年（昭和11年）にはアスンシオンの東南132kmの地点にあるラ・コルメナ（La Colmena）に数回に分かれて約800名の日本人移住者が移住して棉花、米、果実等の栽培を始め現在では模範的な豊かな移住地として成長している。

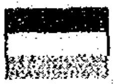
戦後、移住再開後1954年（昭和29年）からラ・コルメナに入植したほか、東部アルゼンチン国境のエンカルナシオン近くのチャベス国立植民地に120家族が入植を始めた。又、1959年（昭和34年）7月には日パ移住協定が締結され、30年間に85,000人の日本人受入れが認められ、又同年10月、両国間に380万ドルの造船借款が成立し、1961年には9隻の船舶がパラグァイに引渡されて河川輸送に活躍している。1955年には隣接のフラム移住地へ600家族が入植した。広島県沼隈町、高知県大正町の町ぐるみ移住もこのフラム移住地である。1960年（昭和35年）海外移住事業団は、アルトパラナ移住地（83,580ha）を更に1963年には国際道路沿いのイグアス移住地（87,700ha）を購入造成して移住者の受入れを始めている。この他ブラジル国境に近いペドロ・ファン・カバリエロ市近郊のコーヒー園に雇用労働者として約137家族が移住したが、現在ではそれぞれ独立してコーヒー栽培に従事している。

1961年における対日貿易は往復550万ドルで極めて低調であるが、年々増加しており、著しい輸入超過である。パラグァイの主な対日輸出品はとうもろこし、棉花、原毛、大豆等で、輸入品は綿織物、ミシン、玩具、自動車部品等である。

ラ・コルメナが町から郡へ昇格した時の初代郡長は日本人であった。日本人移住の歴史はまだ日が浅く、目立った活動はないが約6,300名の在留日本人は現在主として農業に従事し、その勤勉さと技術によって漸次生活の基礎を築いている。更に移住者の増加と日系2世の成長につれてその発展が期待されている。今後は農業移住の推進とともに企業の進出をも計り同国の経済開発に積極的に協力することによって両国の友好的発展が期待される。

第6節　ボリビィア

自然　ボリビィアは昔インカ帝国の一部分をなしチチカカ湖周辺にはインカの遺跡が多い。1535年スペイン人ピサロによって征服され、スペインの植民地となった。18世紀はインディオとの混血を主体として植民地政策に対する反乱が繰り返され、1809年以降独立運動が起こり61年間にわたる戦闘の後、遂に1825年スペイン軍を破って独立を宣言しシモン・ボリバール将軍を記念してボリビィアと命名した。

> **国名と国旗**
>
> 
>
> 南米の解放に力をつくし、建国に貢献したシモン・ボリバール将軍を記念してつけられたもの。国旗は長方形で横に3等分し、上から赤、黄、緑の3色、中段の黄色部の中央に国章が入っている。3色旗の赤は動物を、黄色は鉱物を、また緑は植物とそれぞれ産物の豊富さを表わしている。

ボリビィアは南米大陸を縦走する雄大なアンデスの高地とその河谷によって形成され、南米大陸の中央部に位しパラグァイと同じ内陸国で、面積は約109万km²でわが国の約3倍にあたる。気候は地形に従って変化が多く、高地は緯度に比べて気温が低い。主要都市の気候は次のとおりである。

都市名	南緯	標高 (m)	平均気温	雨量 (mm)
ラパス	16°　30′	3,690	10°　1′	622
ポトシ	19°　35′	4,060	7°	600
サンタ・クルス	17°　46′	437	23°	1,359
コチャバンバ	17°　20′	2,558	17°　1′	508

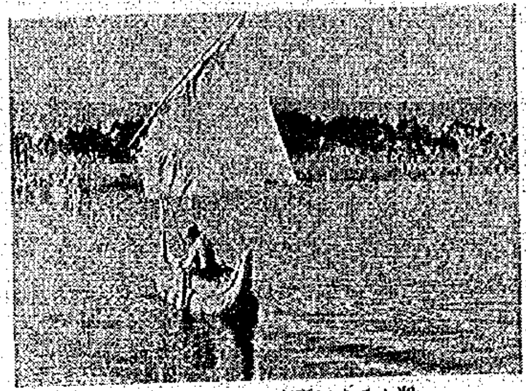
地勢的には次の3地域に大きく分けられる。

1.　山岳地帯　西部を北から南にアンデス山脈が走り、チリ、ペルーとの国境線を形成して、平均海抜3,600m以上の高原と山岳で占めており、この山岳地帯は主として鉱山地帯でボリビィア全土の約1/3を占めている。

2.　渓谷地帯　アンデス山脈の東傾斜面に属し、平均海抜2,500mから700mまでの高度を渓谷地帯と盆地とで形成している。この地帯が全土の約1/7を占めている。

3.　平地暑熱地帯　ボリビィアは高山国として知られているが、平地は全土の1/2強の広さで、平均標高も750m～150mまであり、東方山麓平原は遠くブラジル大陸に続いている。

住　民　人口は約354万人、1940年頃の人口増加率はわずか1.06%に過ぎなかったが、医療及び衛生思想の普及によって近年では2.27%の増加率を示している。全人口の52%以上を占めるインディオはインカあるいはそれ以前から住んでいる原住民の子孫（ケチュア族、アイマラー族等）である。彼らは低地の気候を好まず、又昔から高地に住んで、外敵の侵略に備えるという習性を持っている。人口の比率はおおよそインディオ52%、混血人28%、白人13%、その他7%となっている。


海抜3.800mの高所にあるカ湖

インディオは主として農業と鉱山労働者として働いている者が多く、混血人はスペイン人とインディオの混血で社会の中堅層を占めている。白人はヨーロッパ系の子孫で主要都市で貿易と商業方面に多く従事している。

主要都市

ラ・パス市（La Paz＝平和の意味）人口約45万人。

ボリビア国の首府。1548年スペイン人によって創設された古都で、政治、経済、文化の中心地であり、街の中央部の標高は3,700mあり、世界で1番高い所にある首都といわれ、酸素が少なく初めての旅行者は最初不快を味うことがある。サン・アンドレ工科大学があり、チワナの発掘品展示場、図書館、競技場等が整っている。国際航空路の重要な中継点でもあり、鉄道はラ・パス＝ブ

ブノス・アイレス間アリカ（チリ）間の国際列車が発着している。わが国の大使館がある。

コチャバンバ市 (Cochabamba) 人口約10万人、国内第２の都市で、農商業の中心地で、避暑地として有名である。当市はボリビア国のほぼ中央に位し気候も良くアルゼンチン国境地帯に至る石油地帯の各石油発掘会社（米・英系）のボリビア本社の所在地となっている。サンシモン大学がある。

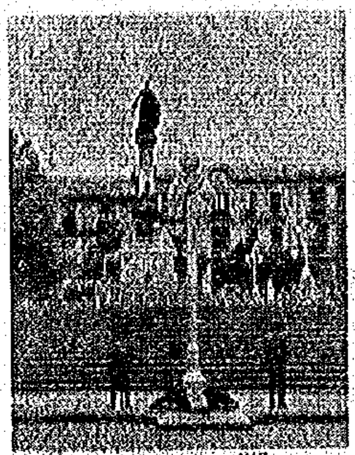
サンタ・クルース市 (Santa Cruz de sierra＝山脈の聖なる十字架の意) 人口約６万人。砂糖、コーヒー、米等の集散地であり、附近に日本人のサン・ファン移住地及び沖縄第一、第二移住地がある。従ってここはボリビィアにおける、日本人移住地の中心地で、わが国の領事館もある。又ガブリエル・レネ・モレノ大学がある。

リベラルタ市 (Riberalta) 人口約８,000人。

天然ゴム、栗などの集散地であり、日本人約30家族が住んでいる。かって、850人以上の日本人が住んでいたといわれ、1908～14年頃ペルーから天然ゴム採取のためボリビィアに入った日本人の根拠地であった。

現代への歩み

ボリビィアはかっては世界最大の銀産国であったが、19世紀末にはもはや過去の面影はなく、かえって錫鉱山の開発により活気づいた。ボリビィアについて特記すべきことは硝石をめぐってチリとペルー・ボリビィア連合軍の間で争った太平洋戦争(1881～1884年)と、領土と油田確保をめぐってパラグァイとの間におこったチャコ戦争(1932～1935年)でこの２度の大戦に破れ、特にチャコ戦争によって約５万人にのぼる男子を失い国力は大いに疲弊しその後長い間インフレと革命による政治の混乱がつづいた。更に外国資本と結託した鉱山財閥と保守反動化した政府は国民大衆を貧困に追いやり、遂に1940年代から国民革命運動が激化するに至った。1951年大統領選挙において革命運動は成功し、パス大統領は普通選挙の実施、鉱山の国有化、農地改革等を断行し、いろいろの困難を克服して新しいボリビィア建設の基礎を作った。その後アメリカの援助やＩＭＦの協力をうけ、1957年以降インフレは抑制され、経済開発10カ年計画の樹立と外資導入がすすめられている。が、更に


ラパス市ムリリヨ広場

今後の政治と安定的経済開発が期待される。

社会と文化　宗教はカトリック教が大部分を占め国語はスペイン語である。文盲率は1950年頃約65%であったが政府においては特に教育に力を入れ文盲退治に努力している。住民の⅔は農業に従事しているが、耕作面積が少なく農業生産物の自給自足ができないため毎年外国から大量輸入しているが、農地改革や農業技術の向上をはかるとともに日本人移住者による農業開発が大いに期待されている。経済の中核は鉱業で輸出の90%は鉱産物で錫の産出は世界第2位で銅鉛等が主産物であるが近年石油の開発も急速にすすめられている。従来国民生活は一般に水準が低かったが最近逐次向上している。

全人口の52%を占めるインディオの大部分は今でも彼らの言語を語り昔ながらの風俗習慣を守り、自給自足的農耕に従事しており、人種的文化的な異質性をかかえ、これらの教育と国民的同化こそボリビィアにおける大きな課題であろう。

日本との関係　1916年(大正5年)わが国とボリビィアとの間に通商条約が交換され国交が始まり戦後はまだ平和条約は未批准であるが、1952年日本との間に国交回復の公文が交換され、現在相互に大使館を設けている。対日貿易は1961年において往復630万ドルでわが国の大巾輸出超過である。目下銅鉱石の試掘をしている日東鉱山及び三菱金属両社の操業が本格化すれば更に貿易は激増するものと思われる。

現在在留日系人は約4,100名といわれ、その中戦前移住した邦人は70%が商業、20%が農業、他が工業等に従事しており、戦後入国した移住者は殆んど農業に従事している。

1956年（昭和31年）8月日本とボリビィア国との間に戦後始めての移住協定が締結され、向う5年間に1,000家族、又は6,000人の受入れが認められ更にこれが延長され現在に至っている。

ボリビィアにおける日本人移住地はサンタ・クルースのサン・ファン地区（35,288ha）に設けられ、1955年より集団入植を始めており、既に約1,500人が営農に励んでいる。沖縄人移住地については琉球民政府が米国の経済援助により第1、第2の移住地を建設している。サン・ファン移住地は国有地を日本人移住者のためにボリビィア政府が無償で一戸当り50haを解放したもので、入植当初はいろいろな困難もあったが次第に営農も安定しつつある。この国では農産物の自給ができておらず、ボリビィア国外貨の40%にのぼる農産物輸入を行っている事情にあるが、流通市場の研究と相まって農業経営の多角化を促進することにより、農業移住は今後更に検討の上推進すべきであろう。又今後農業ばかりでなく、農産加工の企業化及び鉱山開発による技術者の進出も期待される。

かって、あるイギリス人は「チチカカ湖を愛し、遠いインカの華やかな夢を追って無為に過しているのがボリビィア人であり、金の椅子に腰かけた乞食である」と彼らを評したが、無尽蔵ともいえる地下資源を持ちながら、その開発は著しくおくれ、最近漸く政治の安定と相まって経済開発がすすめられている。この国情下にあって誠実勤勉な日本人の能力は高く評価されている。日本人のボリビィア移住の歴史は古く、明治34年頃ゴムを求めてペリーからアンデスの峻険を越えて入国した人々によって始められている。国境のパンド州には、東京、名古屋、横浜などという地名が小さな部落に未だに残っているが、これは当時の入国者が故国を偲んでつけたものであろう。

ボリビィアの日系人はその数の割合に驚くほどこの国の社会で活動しており、政府の要職についている者が多く、現在この国の紙幣署名人は日系2世でありその他高級軍人や役人も多く、ベシノ州には日本人一世の市長もいる。これら日系人はその勤勉と努力によってこの国における地位と社会的信用を築き上げこのアンデスの中央部に見事に花を咲かせ、実をみのらせたのであって今後と

も両国の友好と理解の上に貢献することであろう。

第7節 ドミニカ

国名と国旗

国名の起りは、サント・ドミンゴ島の統治者達がカソリック教のドミニコ派に属していたことからドミニカ (Repullica Doninicana) が由来したと云われている。

国旗は白十字で四分され、左上、右下が青、右上、左下が赤で、青は神、赤は国家を、白は自由を表わし、白十字の中央に国章が入っている。

自然

この国はカリブ海に浮かぶサント・ドミンゴ島の東部2/3を占め黒人の国ハイチと隣接している。面積は55,600km^{2}でわが国の九州、四国を合わせたよりやや小さい。島には中央山脈が走り山岳地帯が多いが、東部は殆んど平原地帯で甘蔗園が多い。

熱帯に属するので、四季の区別は明らかでなく、年中夏の気候であるが、カリブ海の貿易風のため気候は著しく緩和されている。1年は雨期（5、6、7及び10、11、12月）と乾期に分かれており、首都サント・ドミンゴ市の平均気温は約24°Cである。

住民

全人口は約320万で人口増加率は3.4%の高率を示している。人種別人口比はおよそ白人28%、黒人11.5%、混血60%、その他0.5%で、インディオはスペインの開拓初期に征服され殆んどその影を留めていない。隣国ハイチは黒人の国で一時ハイチに占領されたことがあり黒人の要素が濃い。その他東洋人としては都市に生活する中国人約1,200人と、1961年以降移住し定着した約500人の日本人が、農業に従事している。

主要都市

サント・ドミンゴ市 (Santo Domingo)人口約50万。

ドミニカの首府で1936年までサント・ドミンゴと称していたが、トルヒーリ

ヨの独裁政権下にトルヒーリヨ市と改名され、更に1961年トルヒーリヨ政権崩壊と共に再びサント・ドミンゴと称している。西半球におけるヨーロッパ人最初の植民都市で、スペイン人のラテン・アメリカ侵略の重要拠点であった。コロン初代総督が1510年築いた居城は現在博物館になっている。市はオサマ河畔の美しい港市で政治、経済、文化の中心地である。

市内には南米最古の大学の１つとして有名なサント・ドミンゴ大学がある。わが国の大使館がある。

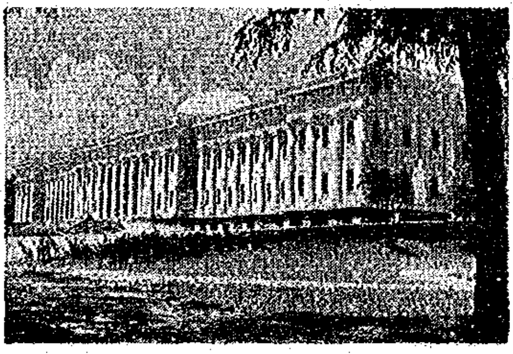
サンチャゴ市 (Santiago) 人口約12万人

この国第二の都市で商工農業の中心地であり、シャツ、タバコ、ラム酒等の製造工場が多い。

発見から現在まで

コロンブスは1492年12月この島を発見してエスパニョーラと命名し、翌年に新世界最初のスペイン植民地を建設した。それ以来約 100年間サント・ドミンゴ島はカリブ海を中心とする植民政策発展のための最大の拠点となるとともに、スペイン文化をラテン・アメリカに伝えた基点ともなった。ラテン・アメリカ地域を通じて最初に裁判所、病院、カトリック修道院、大寺院、大学等が設けられた。コロンブスは第２回の航海のとき、甘蔗を植えやがてそれがキューバ、メキシコにも移植された。1508年には最初の砂糖工場が設けられている。

16世紀から17世紀にわたってスペインの外に新世界への発展と領土拡張を狙っていたフランス、イギリス、オランダの海賊部隊はサント・ドミンゴ島を攻略したが、フランスの勢力が最も強く、1697年島の西半分を占領した。その後フランスの勢力はスペインを圧倒し、1795年にはスペイン領の東半分もフランスの領有となった。



サント・ドミンゴ市の国立美術館

1804年ハイチ人はフラン

スから独立したが、サント・ドミンゴ島は1809年までフランスの統治下にあった。それから5年後、イギリス、スペイン両国がフランスと交戦中、同島のスペイン植民者はフランスに反旗をひるがえしてスペインに帰属した。その後、1821年、1844年と2度にわたり革命運動が起こり遂に成功したが、同島全域の支配を企てていたハイチの圧迫に苦しみつづけた。この関係は現在でもなお尾を引いており、両国の関係はあまりよくない。また20世紀に入ってから一時米国の支配下にあったこともあり、支配者の交替がつづいた。

第二次大戦後わが国の移住者を招いて農業改善を計画したのは1930年以来、大統領として独裁を振ったトルヒーリョ元帥で、彼は財政を整備し、各種事業をおこす等政治的手腕を発揮したが、反面において、一般大衆の反感を買い、遂には1961年軍のクーデターによって暗殺され崩壊し現政権が樹立された。

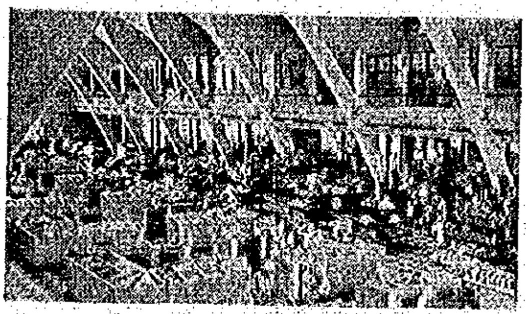
産業と文化　言語はスペイン語が支配的で宗教もカトリックが圧倒的に多い。国民の37%は文盲といわれ、社会構造としては貧富の差が甚だしく中産階級が割合に少ない。現在政府は貧民の救済、文盲撲滅、社会保障の充実に努力している。

1959年以来カリブ海をめぐる国際情勢の不安が続いたが独裁政権トルヒーリョ元帥の崩壊後は、アメリカの援助をうけ政情も安定しつつあり、国情からして総合的長期経済計画はないが、農業開発には大いに力を入れている。国民の約85%が農業に従事し輸出の約90%は砂糖であり、この国の経済は砂糖の生産に大きく依存している。

工業は製糖業が最も盛んでその他は軽工業程度である。この国の林業では造船用のリグナムバイタ一材が特産で日本えも輸出されている。アメリカ・イギリス・カナダの外国資本が進出して製糖工場を始め電信、電話、ボーキサイト採掘会社等を経営しており、特にアメリカ民間資本の投資はめざましく主要産業に対する支配力は大きい。

ドミニカの農耕適地は国土の½と見られているが、実際に耕作されているのは国土の ¼ に過ぎない。永い間農民は貧困に苦しんだがトルヒーリョ政権以来、農業技術の向上、機械化教育、衛生、融資、土地の配分など農業の振興が

図られた。あわせて外国移住者の導入がすすめられ、1938年ユダヤ人の難民を受入れ、1955年にはスペイン人が756 名入国している。



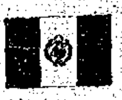
サント・ドミンゴ市の総合市場

日本との関係 1956年日本人が初めてハイチ国境近くのダハボン地区に30家族が入植し、その後も引きつづいて1959年3月までに計 1,319 人が7カ所に入植して、米作をはじめコーヒー、野菜、果樹などの栽培に従事していた。日本人入植の歴史は始めてであり言語、風習などの点でも不自由が多く、当初苦労が多かったが、ドミニカ政府としては、住宅、水道の便を提供し、入植初期の生活補給金を支給するなどの好遇を与えた。このような恩恵はラテン・アメリカへのわが移住者に対して異例の優遇であり、移住希望者は多かったが、政情の不安、耕作地の一部不適その他の理由が重なり、トルヒーリョ政権の崩壊とともに一部は集団帰国し、又一部は南米へ転住した。これは戦後移住史上まことに遺憾なことであった。

幸いに残留した約 500 名の移住者は真剣に新しい移住地づくりに専念し、政情の安定と相まって明るい希望の下に安定した営農をすすめており、特に日本人の米作や野菜作りはドミニカ国民から高く評価されている。

第8節 ペ ル ー

国名と国旗



〔国名の由来〕 現在のペルーの北部地方を土語でビールと呼んでいた。それがペルーと変ったもので、その意味は詳らかでない。

〔国旗〕 赤白赤、縦三条の国旗はスペインから独立するときに定められたもので、赤は勇気と正義を表わし、白は正常と平和を護る意味と言われる。

戦後ペルーへのわが国の移住は殆んど行なわれていないが、南米におけるスペイン植民地の中心地であり、又日本人が集団で南米へ移住した先駆をなし、幾多の困難と悲劇を越え、今日の安定と繁栄を築き上げた移住史上の意義ある事実を知つて頂くために採り上げることにした。

自然と人 南米大陸の中西部、太平洋岸ぞいに南北に延びる細長い国である。面積は約130万km²でわが国の約3.4倍に当る。

海岸地帯はアンデス山脈から太平洋岸にひろがる南北約2,000kmの地帯であり、森林地帯は全土の50%を占め、山岳地帯はアンデス山脈を中心として一面の禿山をなしているが、海抜300mから以上になると大樹海でおおわれている。この地帯は地味が豊かで農牧畜が行なわれ又鉱産物に富んでいる。

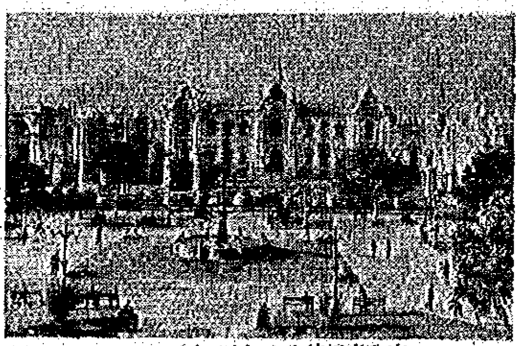
気候は、熱帯と亜熱帯地に属している。地勢と気象の関係で寒、暑両面があるが、海岸地帯の平均気温は約22度である。

人口は約1,050万人と推定されており、人種構成はおよそ白人（スペイン系）13%、白人とインディオの混血が約37%、インディオ約49%と、少しのアジア人、黒人となっており、人口増加率は2.7%を示している。

主要都市

リマ市（Lima）人口約171万。

1821年独立以来の首府で、経済、文化の中心地である。スペイン植民地時代既に5世紀にわたる歴史をもつが、大都市として発達したのはまだ新しい。リ


ペルー（リマ市）の大統領府政庁

マック河の灌漑に依存し、砂漠地帯のオアシスといった感じの市街である。国立総合大学があり、わが国の大使館もある。

カリヤオ市 (Callao) ペルー第2う都市で人口約14万。

ペルー第1の貿易港であり、同国輸出の30%、輸入の7%が取扱われている。また主要漁港の一つでもある。

クスコ市 (Cuzco) 人口約7万。

インカ帝国の古都で、背後にサクサワマンの旧城塞がある。昔から織維工業を以て知られ、国立総合大学がある。

イキートス市 (Iquitos) 人口約6万。

東北部唯一の都市で、アンデス山東麓アマゾン河に臨み、アマゾン上流航行の中心地で、対外貿易港として重要な地位を占めている。

現代への歩み 1533年スペイン人ピサロが奸計をもってインカ帝国を征服したことに始まり、ピサロは一時スペイン植民地と宣言してリマに首都を定めたが、1541年彼自らも暗殺された。

次いで1544年スペインは、メキシコにおくれること15年にしてペルーに副王をおき、以後300年にわたる植民地統治を行なつた。19世紀に至り独立運動は勢を増し、1820年アルゼンチンの英雄サンマルチン将軍に率いられた連合軍は遂に副王を敗り、1821年独立を宣言した。

更に1824年シモンボリバール将軍の来援を得て、完全独立しボリバールは独裁者としてペルーを支配した。

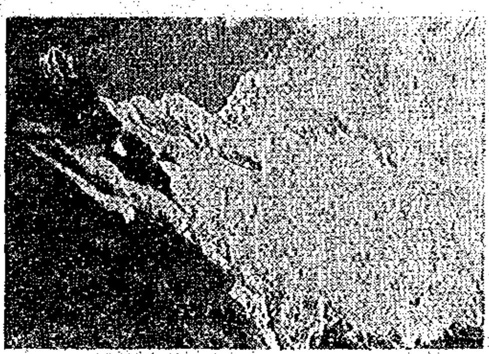
次いでペルーは、1879年の太平洋戦争において敗れ、その後政争革命が相次ぎ軍部を背景として政界を牛耳る大地主と外国資本に対し現在アプラ党の活動がめざましく伸びている。今後政情の安定を取り戻し経済開発と社会改革が大

きく進展することが望まれている。

日本との関係 わが国とペルーとの関係は南米において最も古く明治5年(1872年)横浜港において中国人労働者をペルー汽船マリア・ルイス号より解放したいわゆるマリア・ルイス号事件がおこり、翌明治6年(1873年)には両国間に通商仮条約が締結された。次いで明治22年には高橋是清たちがペルーに渡り銀山の経営を始めたが失敗した。これが南米における日本人の企業進出の第一歩であった。当時ペルーは農業開発のため中国人を奴隷同様の待遇で導入していたが、明治32年(1899年)始めて日本人790名が集団渡航し、リマ市西北700 kmの甘蔗農園に雇用労働者として入植した。ところが労働条件は極めて悪く、労働は苛酷で移住者は非常な辛苦を味わい、中には遂に脱耕してボリビィア、ブラジル等へ逃亡する者も多かった。しかしその後昭和の初期に至るまでに約30,000人が渡航した。これら移住者は当初農業労働者として渡ったがペルーは封建的大地主制度下にあり、労働者が土地を求めて独立することはなかなか容易でなかったため、邦人の中には土地に根を下ろさず都市に集まる結果となった。そして商業や軽加工業等を営む者がふえ、日本人の孤立的集団を作り、やがてペルー人の商店を圧迫するようになり反日的気運を生むことになった。又当時世界的に国家主義風潮が強まった影響もあり、ペルーは昭和9年(1934年)日本との通商条約を破棄し又日本人の営業及び移住の制限令を公布し著しく日本人を差別待遇するようになつた。昭和15年(1940年)には、リマ市において排日暴動がおこり、日本人商店の焼打ち略奪事件が惹起され、次いで第2次大戦の勃発により、昭和17年には対日国交を断絶し、これによって在留邦人有力者を逮捕し、そのうち 1,600 名をアメリカへ追放し一切の邦人

盛装したインディオの娘たち

事業を接収する等日本人は非常な圧迫と侵害をうけたのである。しかし戦後27年両国の国交恢復に伴ない、戦時中凍結された邦人資産も逐次解除返還され、又ペルー永住在留邦人の家族呼寄せも許可されるに至った。現在ペルー在留の日系人は約5万人といわれ一般に中流以上の生活を営みその2世は社会の各分野に進出して大学教授、医師、法律家などの各方面で活躍している。日系人の80%はリマ市とその周辺に住み、主に商工業を営んでいるが、最近日系の漁粉工場が進出し注目されている。



標高5,830mタウイラフ山の氷瀑

又対日貿易は南米においてブラジルに次ぐ第2位で近年文化交流も活発である。両国の関係はますます密接化しており、30年前に比べて在留邦人の社会的地位は改善され、よくペルー人社会に融けこみ、対日感情も好転している。今後日本人受入れの門戸が開かれ企業の進出も活潑化することが期待され、永い冬が去って漸く花咲く春が近づいた感を深くするものである。

第9節　メ　キ　シ　コ

メキシコも現在日本人の本格的移住は行なわれていないが中米におけるスペイン植民地の中心地であり、現在なおその地位は高く又日本人の中米移住史上密接な関係がある。

自然と人　北は米国に隣接し本土を南北に縦走する西及東マドレの二大山脈があり、この中にポポカテペトル、イスタシウァルトの2大名山の高峰が聳えている。地勢は海岸地帯から次第に中央部にかけて隆起し、広大な高原地帯をなしているのが特徴で、河川が乏しく水利の不便はメキシコ産業発展上大きな障害となっていたが近年ダムの建設がすすめられている。

国　名　と　国　旗

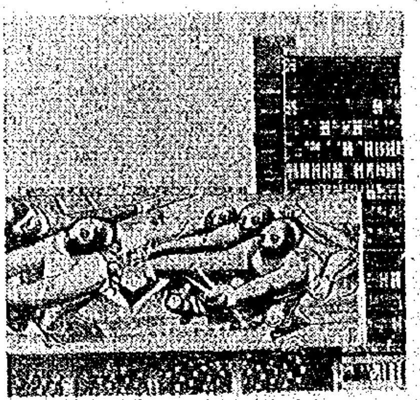
〔国名の由来〕　ラテン・アメリカ最古の文化を築いたアステカ民族は「メクシ」神を信仰していた「コ」は土語で「場所」を意味し、メクシ・コはその神の在所であり、それがメキシコとなった。（別の説もある）
〔国旗〕　サボテンの山の前面に湖水があり、湖水の彼方から朝の太陽が昇る。このような場所は繁栄する、という或る聖賢の予言によって現在の首都メヒコ（メキシコ・シティ）が選ばれた。国旗はその国の隆盛を表わしている。

面積は約197万km² でわが国の約5倍、ラテン・アメリカ第3番目の大国である。

気候は海流、土地の高低、及び緯度の影響等で著しく異なり、熱帯から寒帯にわたる多様的な気候を示している。北部は大半砂漠的様相を呈し海岸地帯は一般に熱帯的で内陸の高地は概して気候温和である。多少異るが四季の別ははっきりしないで11月～5月は乾季6月～10月までが雨季とされている。メキシコ市が在る中央高原地帯は1、2月頃零下に下る日も珍しくない。

人口は約3,720万で人口増加率は3.2%をこえている。

人種構成は白人とインディオの混血が約60%を占め国民層の中核をなし、文化程度の高いアステック族を始め低級なアパッチ族その他の純粋インディオが約30%を占め、白人は約10%に過ぎない。


メキシコ大学の壁画

主要都市

メキシコ市（México）人口約290万

海抜2,200mの高原に位し、隣接町村を合わせて連邦区と称しスペイン中世紀風の面影とフランス風の近代文化とが融和した美都として知られている。年間平均気温16°Cで快適な都市で附近にはアステックの遺跡等も多い。わが国の大使館がある

グァダラハラ市 (Guadalajard) 人口約50万

メキシコ第2の都市で文教の中心地である閑寂な古都で、陶器は代表的産業である。

モンテレイ市 (Monterey) 人口約45万

メキシコ第3の都市で北部工鉱業の中心地となっている。メキシコ第一の製鉄工場があり、活況を示している。

メリダ市 (Mérida) 人口約18万

ユカタン半島最大の都市で住民はマヤ族の血をうけ特異である。附近にはマヤ文化の遺跡が多い。

アカプルコ市 (ACapulco) 人口約11万

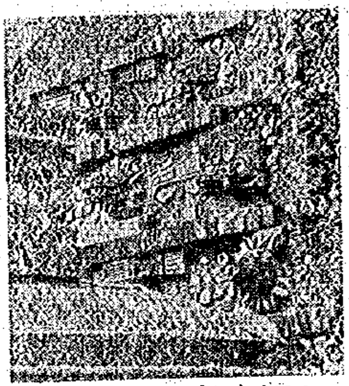
太平洋岸の良港で海水浴場としてもマイアミに匹敵して有名である。慶長年間支倉六右衛門がローマへの途中上陸したところである。

現代への歩み 先住インディオはユカタン半島にマヤ文化を築き、又一方アスティック族等によって中部高原地帯にアスティック文明が栄え、メキシコ市が築かれ、アスティック帝国(1324~1521年)は永くその威容を誇っていた。1517年スペイン人コルドバのメキシコ発見のあと1521年フェルナンド・コルテスがアステック帝国を征服し植民地を建設するに至った。

コルテスは文化程度の高い騎士道的香りに満ちた人物であったため、インカ帝国を滅したピサロと異なり、アスティック文化に理解を示したので、その後独特のメキシコ文化が育った。メキシコ絵画、民芸品等は世界的に有名である。1529年スペインはメキシコに始めて副王をおき中米大陸経営の中心地とし、爾後約300年にわたる植民地統治がなされた。

1810年愛国の志士イダルゴ神父による独立運動がきっかけとなり1821年独立した。その後政争革命が相次ぎ1846年にはテキサス州の領有をめぐって米墨戦争を戦って敗れ、領土の5分の2を失い1864年には3カ年にわたりフランスの支配をうけ、その後も革命がつづき1924年に至り漸く革命は一応終結した。現代においてはラテン・アメリカの中で最も政治的に安定し経済的にも成長を続けており、米国とも協調関係にありその国際的地位は高い。

日本との関係 日本とメキシコとの関係はラテン・アメリカ諸国中最も古く



テオティウカン市にあるアステック族の遺跡

メキシコ副王から選ばれたマニラ太守がフィリッピンへの途上、難船して土佐に漂着し（1596年）たことに始まっている。

その後1610年には帰国途中のマニラ太守が上総沖で難船漂着した際徳川家康と会談しており、その折ウイリアム・アダムス（三浦按針が家康の命をうけ帆船を建造しマニラ太守を送り日本人数名が同行している。支倉六右衛門一行がローマへの往復時メキシコに立寄り国賓として待遇をうけ日本とメキシコの間に交渉が芽生えたが、その後、約280年間杜絶し、明治20年海軍練習艦筑波がメキシコ訪問したのが近世の最初である。

明治21年通商航海条約が初めての対等条約として締結された更に明治24年メキシコとの間に日本人の移住について交渉が始まり、明治28年コーヒー移民35名がメキシコへ渡った。即ち榎本移民（榎本武揚のあっせんによる）として知られている。

その後、炭鉱、甘蔗地帯へ相次いで移住者を送り出し相当成功を収めたが、明治43年（1910年）以来20年間に及ぶマーデロ革命がおこり、日本人移住者は或は北米、キューバへ逃れ苦難の道を歩んだのである。その後政情の安定とともに自由渡航又は呼寄せにより移住者はふえたが第二次大戦により杜絶し、在留邦人は再び集団抑留され悲哀を蒙った。

戦後在留邦人は日浅くして復興し現在立派な成功を収めて活躍している。現在在留日系人は約6,500名と推定されている。

両国間の貿易は往復約1億4千万ドルで日本側の一方的入超が特徴である。メキシコ棉の輸入が主なものである。1955年両国間の文化協定が発効し文化交流は盛んとなり、又日墨文化会館も建設された。

国内に急増する人口を抱えているメキシコにおいては現在日本人の集団的移住者は受入れていないが、両国の関係が今後ともますます緊密化することが期待される。

あ　と　が　き
（ラテン・アメリカの将来）

ラテン・アメリカ一般と日本人を受入れている各国について、その概要を学んできたが、本章ではそのしめくくりとして「ラテン・アメリカの将来」を展望してみよう。

政治的安定と経済的成長への努力

「ラテン・アメリカをも含めて現代の経済的後進国にとって、資本主義か共産主義かの選択は単に経済開発方式の問題にすぎない。」これは、ラテン・アメリカの経済学権威者プレビッシュの見解であるが、問題の本質をついたものと云えよう。キューバを除いて、全てのラテン・アメリカ諸国は政治的にも経済的にも共産主義方式はとっていない。

現代ラテン・アメリカの特徴は、400 年にわたる植民地的封建的色彩を排除し、政治、経済、社会、文化等のあらゆる面でラテン・アメリカ独自のものを形成しようとする動きの中で、農鉱産物の単一的経済から工業化と産業の多角化へ向っている。又、外国資本と結んで支配してきた大地主階級に対する都市労働者と中産階級の挑戦と、外国の経済的支配を排除しようとする経済的ナショナリズムの動きである。又、全住民の60％以上を占める農民の解放と、孤立していたインディオ、メスティーソ黒人大衆のヨーロッパ化が進められている。

新らしい政治指導者は国家権力の拡大を求め、多くの矛盾を克服しながら全体としては社会改革と経済発展を大きな課題として、これが打開に向って力強く動いているといえるのである。ラテン・アメリカ特有の政権交替による政治的動揺と混乱の中で、この地域の経済開発は1929年に始まる世界大恐慌を契機

として促進され、加えて、近年世界最高の増加率を示しつつある人口の膨脹によって拍車をかけられてきたのである。

元来、資本蓄積の乏しいラテン・アメリカは外資導入が不可欠の条件であるが、従来の外国資本の不当支配を排除しながら経済開発への寄与を図るべく、1960年以降積極的外資導入政策がとられている。又一方農地改革、税制改革ならびに文盲退治等が共通の課題として取り上げられている。

各国別の経済開発と共に国際的市場の拡大が必要とされ、1957年ヨーロッパにおけるＥＥＣの結成に刺戟され、1962年ラテン・アメリカ自由貿易連合（L．A．F．T．A）の結成にふみきり、南米９カ国が加盟し、域内貿易の自由化へと動き出した。他方中米５カ国も1961年以来共同市場の完成に努めている。

共同市場の発足についてはなお多くの障害を残しているが、ラテン・アメリカの政治的結合が経済協力の面からも現実化し始めたとも考えられる。

前述したとおり1961年、ケネディ大統領によって唱えられた「進歩のための同盟」も次第に実効をあげつつあり、更に汎米道路（パン・アメリカ道路）の建設をはじめ、国際連合ラテン・アメリカ経済委員会（E．C．L．A）の活動も活発化しており、今やアメリカを始めとするヨーロッパ諸国のこの地域への協力援助は次第に積極化している。

インフレと共産主義　インフレーションはラテン・アメリカ諸国において共通の著しい現象である。

このインフレは政治の混乱、社会不安の病巣をなしており、各国ともこれが対策に腐心している。現にブラジルでは厳重な貿易統制を行ない、外国系企業の利潤本国送金を制限して国内投資に振り向ける等インフレ対策に努力している。近年ラテン・アメリカ諸国に対する共産主義勢力の浸透は活激化し、キューバのカストロ政権の出現以来ブラジルに部分的に頻発する農民による農地占拠や、ベネズエラの暴動等の現象がみられる。

然し乍らラテン・アメリカの精神界を支配するローマカトリックの活動と、共産勢力の実体を知りつつある多くのラ米諸国は冷静に見守りつつ大局的には

「米州機構」（O、S、A）の中で成長しようとする道を見出しているように見うけられる。微妙且つ複雑な国際政治の動きは単純な結論を許さないが、ラ米諸国の歴史的人種的伝統において「米州機構」の根本的崩壊を招くような事態は想像されない。

結び　1960年代以降におけるラテン・アメリカは世界の注目の中に、国別に事情はそれぞれ異なるが人種的、経済的、政治的悩みを抱きながらも、その後進性と停滞の中から大きく脱皮しようとして、国土の開発と社会経済的改革への努力を続けている。

大きく未来への可能性を持つラテン・アメリカ諸国が、世界から集まる移住者を受入れ、新らしい人種の参加と資本と技術の協力を得て、広大な風土と豊富な資源を活用し、立派な文化と富を築き上げることが、やがては世界の平和と発展に大きく寄与することになろう。

ペルー移民以来約70年、日本とラテン・アメリカの関係は緊密化し、現にこの地域に活躍している日系人は約60万人をこえるといわれている。これら日系人の繁栄はもとより、今後ますます相互の友好と理解が深められ、国際協力提携の実があがることを望むものである。

13世紀—20世紀に至る

世紀 区分	1300年代まで	1400年代	1500年代
ヨーロッパ及びアメリカ	1096～99年　十字軍 1139年　ポルトガル王国建設 1215年　大憲章制定（英） 1338～1453年　百年戦争 羅針盤火薬の発明	ルネッサンス時代 1453年　東ローマ帝国亡ぶ 1453年　スペイン王国成立 1492年　コロンブス大陸発見 1498年　ヴァスコダガマがインドのカルカッタに達す	1517年　ルター宗教革命（独） 1519年～1522年　マゼラン世界周航マニラに達す 1588年　スペイン無敵艦隊イギリスに敗る
日本	1369年　明が倭寇の禁止を請う	1491年　戦国時代始まる	1530年　明が日本人の往来禁止 1542年　ポルトガル人種子島へ鉄砲伝える 1543年　スペイン人平戸へ来る 1549年　フランシスコザビエルが鹿児島へ来て初めて布教 1582年　遣欧少年使節出発 1592年　朱印船制度成立（豊臣秀吉）
ラテン・アメリカ	インカ帝国		1500年　ポルトガル人ブラジルを発見 1515年　スペイン人ラプラタ河を発見 1521年　コルテスがメキシコ征服 1532年　スペイン人ピサロがペルー征服 1533年　インカ帝国亡ぶ 1544年　ペルーに副王おく（スペイン）

移住関係世界略年表

1600年代	1700年代	1800年代	1900年代
1600年　東インド会社設立（英） 1607年　ジェームスタウン建設（英） 1620年　清教徒アメリカ移住 1621年　西インド会社設立（オランダ）ニューアムステルダム植民地を建設 1688年　名誉革命（英）	産業革命始まる 1775～83年アメリカ独立戦争 1776年アメリカ合衆国独立 1789年フランス革命	1812年　ナポレオンはロシヤ遠征に失敗 1816年　ワイマール憲法制定（独） 1823年　モンロー主義宣言（米） 1840年阿片戦争(英支) 1859年　ダーウインの種の起源 1861～65年　南北戦争（米） 1884年　インドシナ征服（仏） 1898年　米西戦争 キューバ独立	1906年サンフランシスコ日本人学童事件（米） 1913年カリフォルニア州にて排日土地法成立（米） 1924年排日移民法成立（米） 1948年米州機構ＯＡＳ結成ＥＣＬＡの設立 1951年ＩＣＥＭ設立（1961年日本もオブザーバーとして参加） 1952年移民帰化法制定（米）
1613年　支倉常長ローマへ 1614年　高山右近マニラへ 1620～30年　山田長政シャムへわたり日本人町首長となる 1635年　鎖国断行	1778年　ロシヤ船千島へ来る	1817年　英船浦賀へ来る 1853年　ペルー浦賀へ来る 1858年　米英蘭仏露との修好通商条約 1860年　遣米使節団アメリカへ（咸臨丸） 1866年　鎖国令解除 1867年　ハワイ移民第一陣 1872年　マリア・ルイス号事件 1884年　日布移民条約 1899年　ペルー移民始まる	1904年　日露戦争 1908年　ブラジル移民始まる日米紳士協定結ぶ 1941～5年　第２次世界大戦 1951年　平和条約締結 1952年　海外移住再開
1671年　イギリス人海賊パナマを襲撃 1697年　フランスはサントドミンゴ島の東部を領有	1763年　ブラジル植民地の首都リオへ移る 1767年　ジェスイット会派新大陸から追放 1776年　ラプラタ副王おく（スペイン）	1804年　ハイチ独立 1810年　以降スペイン植民地の独立運動おこる 1811年　パラグァイ独立 1816年　アルゼンチン独立 1821年　ペルー独立 1822年　ブラジル独立 1825年　ボリビア独立 1865～70年　パラグァイ戦争（パラグァイ ブラジル・アルゼンチン）	1914年　パナマ運河開通 1932～5年　チャコ戦争（パラグァイ・ボリビア） 1934年　二分制限法成立（ブラジル） 1940年　ペルーで排日暴動おこる 1960年　ブラジルの首都ブラジリアへ移る 1961年　ＬＡＦＴＡの設立

ラテン・アメリカ独立

国名	面積	人口	主都	国語	宗教
メキシコ	1,973,400km² (日本の約5.3倍)	3,723万人	メキシコ市 (290万人)	スペイン語	カトリック
キューバ	114,524km² (日本の約半分)	706万人	ハバナ市 (160万人)	〃	〃
グァテマラ	108,889km² (日本の約⅓)	401万人	グァテマラ市 (40万人)	〃	〃
ホンジュラス	112,088km² (北海道と九州を合せた程度)	195万人	テグシカルパ市 (10.5万人)	〃	〃
エル・サルバドル	21,393km²	281万人	サン・サルバドル市 (25万人)	〃	〃
ニカラグア	148,000km²	147万人	マナグア市 (23万人)	〃	〃
コスタ・リカ	50,700km²	127万人	サン・ホセ市 (1[illegible])	〃	〃
パナマ	74,470km²	114万人	パナマ市 (29万人)	〃	〃
ハイチ	27,750km² (四国よりやや大きい)	435万人	ポルトープリンス市 (24万人)	フランス語	〃
ドミニカ	48,734km² (日本の²/₁₁)	322万人	サント・ドミンゴ市 (50万人)	スペイン語	〃
ジャマイカ	11,425km²	164万人	キングストン市 (17万人)	英語	〃
トリニダード・トバゴ	5,128km²	88万人	ポート・オブ・スペイン市 (10万人)	〃	〃

国々情一覧表

独立	通貨	政体	貿易	
			主な輸出品	主な輸入品
1821年 11月6日	ペソ	合衆国	棉花, コーヒー, 銅, 亜鉛, 原油, 銀棒	車輌類, 工作機械, 肥料 鉄鋼資材
1893年 2月15日	〃	共和国	砂糖, タバコ, コーヒー	食料品, 石油及製品, 鉄鋼, 機械, 自動車, 木材 紙類
1821年 9月15日	ケツアル	〃	コーヒー バナナ, 棉花 マニラ麻	食料品, 石油及製品鉄鋼 機械, 自動車, 繊維品
1821年 9月15日	レンピラ	〃	バナナ コーヒー 銀, 木材	繊維品, 機械類 食料品, 石油石炭 化学品, 薬品
1841年 9月15日	コロン	〃	コーヒー, 棉花 家畜, 植物油 砂糖	化学品, 自動車 繊維品, 薬品
1821年 9月15日	コルドバ	〃	コーヒー, 棉花 ごま, 木材	機械, 繊維品 自動車, 化学品 油脂
1823年	コロン	〃	マニラ麻, 家畜, コーヒー バナナ, カカオ, 殺虫剤	機械類, 食料品 化学品, 繊維品
1821年 11月28日	バルボア	〃	バナナ, カカオ, 生えび	一般機械, 自動車 金属製品, 化学品 食料, 鉄鋼, 繊維
1804年 1月1日	グルド	〃	コーヒー サイザル麻 砂糖, 棉花	食料品, 繊維品 機械類, 金属製品
1865年 7月1日	ペソ	〃	砂糖, コーヒー カカオ, タバコ	機械器具, 化学品, 車輌 食料, 燃料, 薬品, 綿製品, 鉄鋼, 紙製品
1962年 8月6日	ポンド	立憲君主制	青海礼, 角甲, ロープ, さめ皮, ボーキサイド	食料品, 繊維品 建築資材
1962年 8月31日	インドドル (BWI)	立憲君主制	石油	機械類, 車輌 食料品, 繊維品 化学製品

国名	面積	人口	主都	国語	宗教
アルゼンチン	2,776,656km² (日本の約8倍)	2,146万人	ブエノス・アイレス市 (360万人)	スペイン語	〃
コロンビア	1,138,355km² (日本の3倍)	1,476万人	ボゴタ市 (133万人)	〃	〃
パラグアイ	406,752km² (日本全土に九州を併せた程度)	186万人	アスンシオン市 (30万人)	〃	〃
ウルグアイ	186,926km² (日本全土の約半分)	282万人	モンテビデオ市 (94万人)	〃	〃
エクアドル	270,670km² (本州と九州を併せた程度)	450万人	キトー市 (35万人)	〃	〃
ベネズエラ	912,050km² (日本の約2.5倍)	787万人	カラカス市 (78万人)	〃	〃
ペルー	1,285,215km² (日本の3.3倍)	1,050万人	リマ市 (171万人)	〃	〃
チリ	741,767km² (日本の2倍)	800万人	サンチャゴ市 (190万人)	〃	〃
ブラジル	8,511,965km² (日本の22.5倍)	7,527万人	ブラジリア市 (20万人)	ポルトガル語	〃
ボリビア	1,098,581km² (日本の約3倍)	360万人	ラ・パス市 (45万人)	スペイン語	〃

独　立	通　貨	政　体	貿易	
			主な輸出品	主な輸入品
1816年 7月9日	ペ　ソ	共和国	食肉，皮革，羊毛 小麦，亜麻仁油， ケブラチヨ・エキス	機械類，鉄鋼製品 燃料，非鉄金属 化学品，木材
1811年 7月20日	〃	〃	コーヒー，石油	機械類，化学製品 車輛，自動車 鉄鋼，薬品
1811年 8月14日	グァラニー	〃	肉，木材，ケブラチヨ，エキス綿花 オイルシード	食料品，繊維品 車輛，燃料，機械 鉄鋼，医薬品
1828年 10月3日	ペ　ソ	〃	羊毛，生肉 皮革	原材料，燃料 潤滑油
1830年 5月13日	ス ク レ	〃	バナナ，カカオ， 木材，羊毛，砂糖 ヒピハパ（パナマ帽）	機械類，薬品 繊維製品，食料品 金属製品
1845年 3月3日	ボリーバッル	〃	石油及び石油抽出物，鉄鉱石	食料品，機械類 金網及び同製品
1824年 12日	ソ ー ル	〃	銅，銀，鉛，亜鉛 棉花，砂糖	機械類，繊維製品 運搬用機器，鉄鋼
1810年 9月18日	エスクード	〃	硝石，銅，鉄鋼石 タングステン	原油，機械類 食料品
1822年 9月2日	クルゼイロ	連邦共和国	コーヒー，棉花 カカオ，砂糖 鉄鉱石，松材 マンガン	食料品，小麦 原材料及製品 化学品，輸送機械 機械類，家畜類
1825年 8月6日	ペソボリビアーノ	共和国	錫，鉛，タングステン，亜鉛，銀	医薬品，ミシン 繊維品，タイヤ類 鉄鋼製品

海外移住読本　下巻

昭和39年3月20日印刷
昭和39年3月25日発行

発行所　東京都港区赤坂田町7の1
海外移住事業団

印刷所　東京都新宿区矢来町126
株式会社　秀英社

81

6

請求番号 81　登録番号 6

著者名 海外移住事業団

書名 海外移住読本 下巻

部課	借出者氏名	貸出日	返却予定日	返却日

LIE